

# 常盤仲之町遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇〇九―一六

常盤仲之町遺跡

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所







# 常盤仲之町遺跡

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、道路拡幅工事に伴う常盤仲之町遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

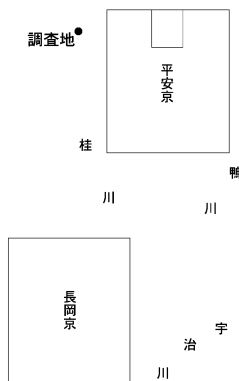
平成 22 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 常盤仲之町遺跡
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦東蜂岡町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2009年12月14日～2010年3月12日
- 5 調査面積 613 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 加納敬二・東 洋一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 土器類・瓦類・金属製品・土製品・ガラス製品ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 加納敬二・東 洋一・辻 裕司・竜子正彦
- 14 執筆分担 目次に記した。
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km



# 目 次

1. 調査経過	.....	(辻)	1
2. 位置と環境	.....	(東)	4
3. 遺 構	.....		8
(1) 基本層序	.....	(辻)	8
(2) 第3面の遺構	.....	(辻・加納)	9
(3) 第2-3面の遺構	.....	(辻)	10
(4) 第2-2面の遺構	.....	(辻)	12
(5) 第2-1面の遺構	.....	(辻)	13
(6) 第1面の遺構	.....	(加納)	15
4. 遺 物	.....		18
(1) 遺物の概要	.....	(加納)	18
(2) 飛鳥時代の遺物	.....	(加納)	18
(3) 平安時代の遺物	.....	(加納)	19
(4) 鎌倉時代の遺物	.....	(加納)	21
(5) 瓦類	.....	(加納)	22
(6) 自然遺物など	.....	(童子)	24
5. ま と め	.....	(加納)	26

# 図 版 目 次

図版1	遺構	第3面平面図 (1:200)
図版2	遺構	第2-1面平面図 (1:200)
図版3	遺構	第1面平面図 (1:200)
図版4	遺構	調査区西壁断面図 (1:100)
図版5	遺構	第2-1面区画施設実測図 (1:80)
図版6	遺構	第2-3面土坑449実測図 (1:20)、第1面土坑実測図 (1:50)
図版7	遺構	第1面土坑実測図 (1:50)
図版8	遺構	第1面土坑132実測図 (1:50)、石組250実測図 (1:20)
図版9	遺構	1 第3面 竪穴480 (北東から)

- 2 第3面 竪穴 445・750 (北西から)
- 3 第3面 竪穴 350 (東から)
- 4 第3面 竪穴 300・700・850 (北東から)
- 5 第3面 溝 802-2 東端集石状況 (北西から)
- 図版 10 遺構
  - 1 第2-3面 高まり 272-3 (東から)
  - 2 第2-3面 調査区北部柱穴群 (西から)
  - 3 第2-3面 土坑 449 蓋石検出状況 (西から)
  - 4 第2-3面 土坑 449 蓋石除去状況 (西から)
- 図版 11 遺構
  - 1 第2-2面 高まり 272-2 断面 (東から)
  - 2 第2-2面 石敷 853 礫・土器敷設状況 (東から)
- 図版 12 遺構
  - 1 第2-1面 全景 (北から)
  - 2 第2-1面 調査区南半全景 (北西から)
- 図版 13 遺構
  - 1 第2-1面 高まり 272-1・溝 500・路面 793 (西から)
  - 2 第2-1面 溝 290 (南東から)
- 図版 14 遺構
  - 1 第1面 全景 (北から)
  - 2 第1面 土壙墓群 (北から)
  - 3 第1面 土壙墓群・柱穴群 (北東から)
- 図版 15 遺構
  - 1 第1面 土坑 100・278 (北西から)
  - 2 第1面 土坑 102 (西から)
  - 3 第1面 土坑 148 (北から)
  - 4 第1面 土坑 268 (西から)
- 図版 16 遺構
  - 1 第1面 土坑 132 (南西から)
  - 2 第1面 土坑 132 鉄製品出土状況 (南西から)
  - 3 第1面 石組 250 (南から)
- 図版 17 遺物 竪穴 350・445・850、溝 802、石敷 853 出土土器
- 図版 18 遺物 土坑 449 出土遺物
- 図版 19 遺物 土坑 100・148・154 出土遺物
- 図版 20 遺物 土坑 102・278 出土土器
- 図版 21 遺物 軒瓦

# 挿 図 目 次

図 1	調査前全景	1
図 2	作業風景	1
図 3	調査区配置図 (1 : 500)	2
図 4	チャレンジ体験風景	3
図 5	現地公開風景	3
図 6	周辺調査位置図 (1 : 5,000)	5
図 7	第 2- 3 面平面図 (1 : 200)	10
図 8	柱列 1・2 実測図 (1 : 80)	11
図 9	第 2- 2 面平面図 (1 : 200)	13
図 10	溝 290 礫群検出状況	14
図 11	溝 290 凝灰岩片検出状況	14
図 12	礎石 280 実測図 (1 : 50)	17
図 13	竪穴 350・445・850 出土土器実測図 (1 : 4)	19
図 14	土坑 449・整地土層 4・溝 290 出土土器実測図 (1 : 4)	20
図 15	土坑 100・102・148・154・278 出土遺物実測図 (1 : 4)	21
図 16	軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	23
図 17	自然遺物など	25
図 18	飛鳥時代遺構概略図 (1 : 400)	26
図 19	平安時代遺構概略図 (1 : 400)	27
図 20	鎌倉時代から室町時代遺構概略図 (1 : 400)	27

# 表 目 次

表 1	周辺の調査成果概要表	6
表 2	遺構概要表	8
表 3	遺物概要表	18



# 常盤仲之町遺跡

## 1. 調査経過

本調査は、梅津太秦線限度額立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務（その1）である。この発掘調査は、京都市建設局事業推進室から委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という。）の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。調査地点は、京都市右京区太秦東蜂岡町地内に所在する。東映太秦映画村の敷地東端から城北街道西端間の幅約 20 m の道路拡幅予定地であり、北接して 2008 年度発掘調査地点（図 6-27）、南接して 2009 年度 2 区発掘調査地点（図 6-28）がある。

調査地点は、常盤仲之町遺跡の南東部に該当する。常盤仲之町遺跡は、古墳時代中期から江戸時代にかけての遺構が重複する遺跡として周知され、周辺の調査では当該期の遺構が多数検出されている。調査地点の北側には平安京と嵯峨野を結ぶ古道である嵯峨街道（現下立売通）が東西方向に延長し、東接して城北街道が南北方向に延長する。また、調査地点は太秦広隆寺の北東に位置する。広隆寺の寺域は未確定であるが、北限ならびに東限は調査地点の北側ならびに西側に近接して想定されている<sup>1)</sup>。

今回の調査では、常盤仲之町遺跡ならびに広隆寺旧境内に関連する遺構の検出を主目的とした。

調査区は、東西約 17 m、南北約 45 m の範囲に設定したが、調査区設定予定地の一部は東映太秦映画村の通路が設置されており、調査対象外とした。調査面積は、約 613 m<sup>2</sup>となった。機械掘削による排土は、場外に搬出し仮置きした。機械掘削に伴い発生した既存配水管などのコンクリート構造物および既存駐車場のアスファルト、金属類などは、分別し産業廃棄物として処分した。

機械掘削後の調査区内の現況は、北端では現地表下 0.5 m で、南端では現地表下 1.0 m で中世の遺構面となり、中央部には周囲よりもやや高まる東西方向の高まりが遺存していた。調査区北西部で現地表下 1.6 m まで掘削された攪乱を除けば、攪乱を受けた箇所は少なく、土層堆積ならびに遺構は比較的良好に遺存していた。



図1 調査前全景



図2 作業風景

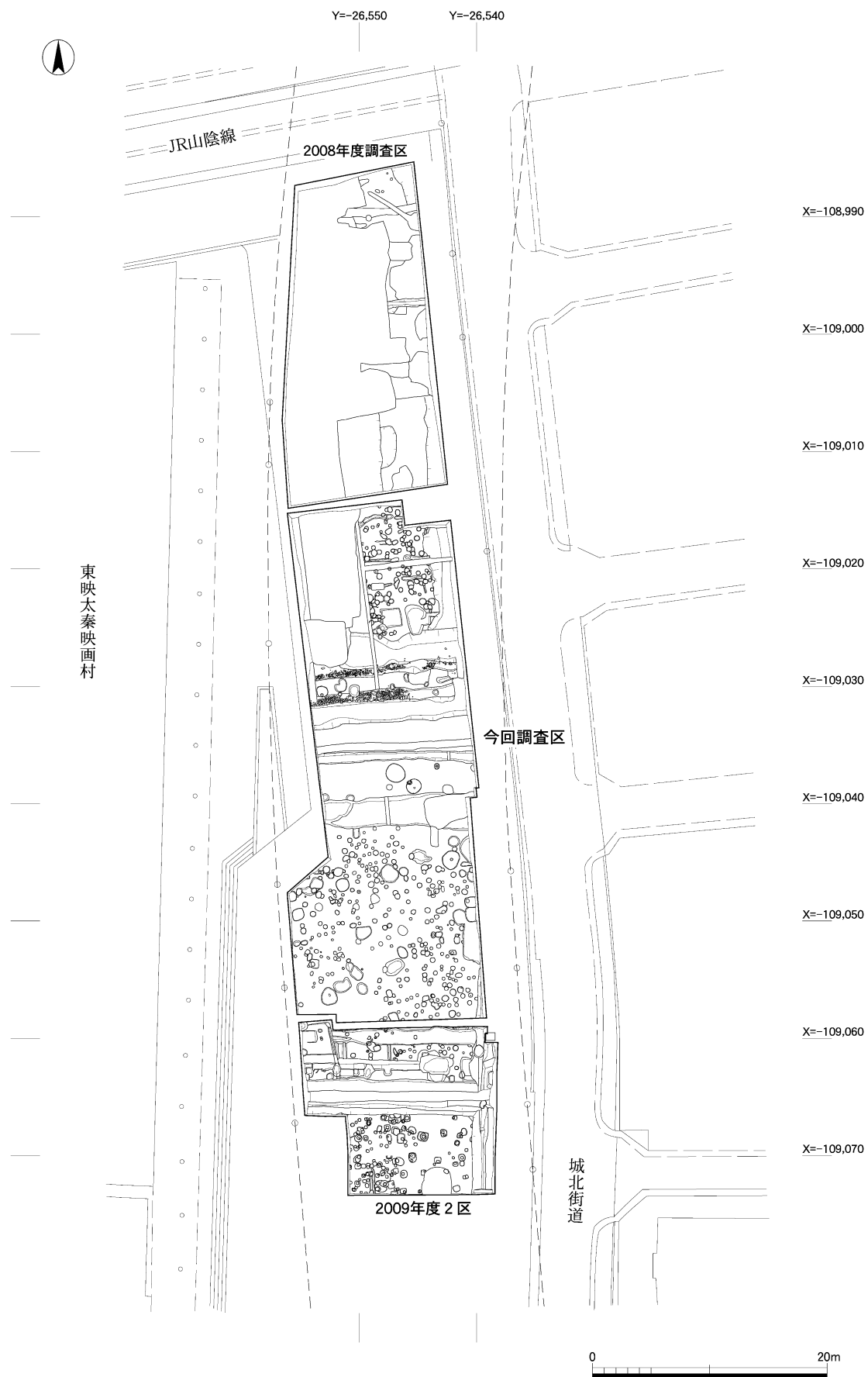


図3 調査区配置図 (1 : 500)



図4 チャレンジ体験風景



図5 現地公開風景

調査は、調査区全体の土層堆積状況から鎌倉時代・平安時代・飛鳥時代の3つの時代の遺構あるいは土層が遺存していることを確認したことにより、それぞれを第1面から第3面として調査を進めた。第1面では、高まりから北側の区域で2008年度発掘調査(図6-27)で検出された落込47に連続する遺構(土坑132)を検出した。高まりから南側の区域では、ほぼ全域で土坑や小土坑ないし柱穴と考えられる遺構などを多数検出した。土坑の中には、瓦器鍋・施釉陶器などの容器や土器を埋納するものもあり、木棺墓あるいは土壇墓などであろうと想定した。第2面では、高まりの箇所では遺構の変遷が認められた。高まりの北側では2008年度発掘調査(図6-27)で検出された落込29に連続する遺構(溝290)を検出した。また、耕作に伴うと考えられる東西方向を示す溝を多数検出した。高まり南側の区域では、ほぼ全域で小土坑ないし柱穴と考えられる遺構などを多数検出した。また、高まりに南接して、地鎮遺構と考えられる土器を埋納した土坑449を検出した。第3面は、基盤層上面にほぼ相当し、調査区全域で竪穴住居、溝などを検出した。第1～3面にわたり調査を実施したことにより、想定した目的を越える重要な遺構を多数検出した。

発掘調査の工程に従い、市文化財保護課による指導を受けた。調査開始直前の2009年12月14日の調査区設定区域確認をはじめとして、調査の進展に伴い、2010年1月6日・1月14日・1月26日・2月18日・2月23日・3月1日の各節目に指導を受け、調査を進めた。3月5日には最終面における指導を受け、発掘調査終了の確認を受けた。また、調査の進展に伴い、当研究所の2名の調査指導委員からそれぞれ2回の指導を受けた。

この間、普及啓発活動の一環として、次の各行事を実施した。まず、京都市考古資料館から京都市立中学校におけるチャレンジ体験授業の一環として、2010年1月19日に安祥寺中学校の生徒4名、2月3日に洛東中学校の生徒1名を受け入れ、遺跡発掘の体験授業を行った。2010年2月27日には、近隣住民を対象とした現地公開を開催した。当日は悪天候であったが、約100名の参加者があり、好評を得た。

なお、調査終了後は、仮置き土を用いて埋め戻し、3月12日には全調査を終了した。

#### 註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年

## 2. 位置と環境

調査地は、古墳時代中期から江戸時代にかけての遺構が重複するとされる常盤仲之町遺跡に位置する。常盤仲之町遺跡は、御室川などによって形成されたと考えられる洪積台地と、桂川の氾濫原や後背湿地である平地までの南に下がる緩傾斜面にほぼ該当する。

調査地点の北側に近接して、東西方向に嵯峨街道（現下立売通）が延長している。この嵯峨街道は、旧行政区画である常盤村と太秦村を貫通しており、平安京と嵯峨野を結ぶ古道として平安時代には成立していたと考えられる。また、調査地点の東に沿って城北街道が南北方向に延長するが、この街道が何時から成立したのかは不明である。近世は常盤村が仁和寺領であったのに対し、太秦村の多くは広隆寺領であった。なお、明治22年（1889）陸軍陸地測量部によって作成された「陸地測量図」によれば調査地点は藪と記載されている。

常盤地区は、平安京に隣接する郊外として、平安時代から歌枕の「常盤里・常盤杜・常盤山」として多くの歌に詠まれており、平安時代前期には嵯峨天皇皇子の源常の別業が営まれた。また、平安時代末から鎌倉時代にかけては、八条女院を始め貴族の領地もしくは別業を御堂として造営されることが盛んであった地域であるが、平安時代中期については不明な点が多い。

太秦地区は、文字通り秦氏の根拠地として知られ、飛鳥時代に秦河勝が建立したとされる太秦広隆寺が現存する。広隆寺は鎌倉時代後半に広隆寺桂宮院を拠点に、葬送儀礼の庶民への普及と太子信仰・仏舎利信仰によって教線を拡大した西大寺律宗真言僧澄禪が勧進上人として再興したことが知られている。また、調査地点の南西には、平安時代後期の弁天島経塚が存在したが、1977年調査（図6-7）の後、2基は広隆寺境内に移築保存されている。

常盤仲之町遺跡では、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物などが台地上や傾斜面から多数検出されており、当該期の集落が存在したことが窺われる。また、遺跡東部の1976年度調査（図6-5）では、鎌倉時代から江戸時代にかけての土壙墓が60基以上検出されており、遺跡北東部一帯が中世から近世の墓域であったことを窺わせる。2006年度調査（図6-23・24）でも室町時代後半の火葬墓と火葬場を示すと考えられる石組の施設が検出されている。

『京都市遺跡地図台帳』によれば、今回の調査地点は、広隆寺旧境内遺跡に東接する。広隆寺旧境内遺跡は、常盤仲之町遺跡の南半の大部分と重複するが、広隆寺旧境内の範囲は不明な点が多く、今日までの調査で確定できているわけではない。今回の調査地点北側に位置する2008年度調査（図6-27）も広隆寺旧境内遺跡に東接する地点の調査である。この調査では、現城北街道に沿って中世の遺物を包含する幅2m以上の南北方向を示す溝が検出されている。また、奈良時代から中世にかけての瓦も多数出土しており、広隆寺旧境内遺跡の東限がさらに東へ広がる可能性を窺わせる資料である。

当該地を含む嵯峨野地域の条里復元は文献史学と地理学によって進められてきたが、それらによれば広隆寺は葛野郡五条荒蒔里に該当するとされる。2008年度調査（図6-27）で検出された現城北街道に沿う南北溝が、五条荒蒔里東限の可能性もあり、嵯峨野条里復元と広隆寺東限の定



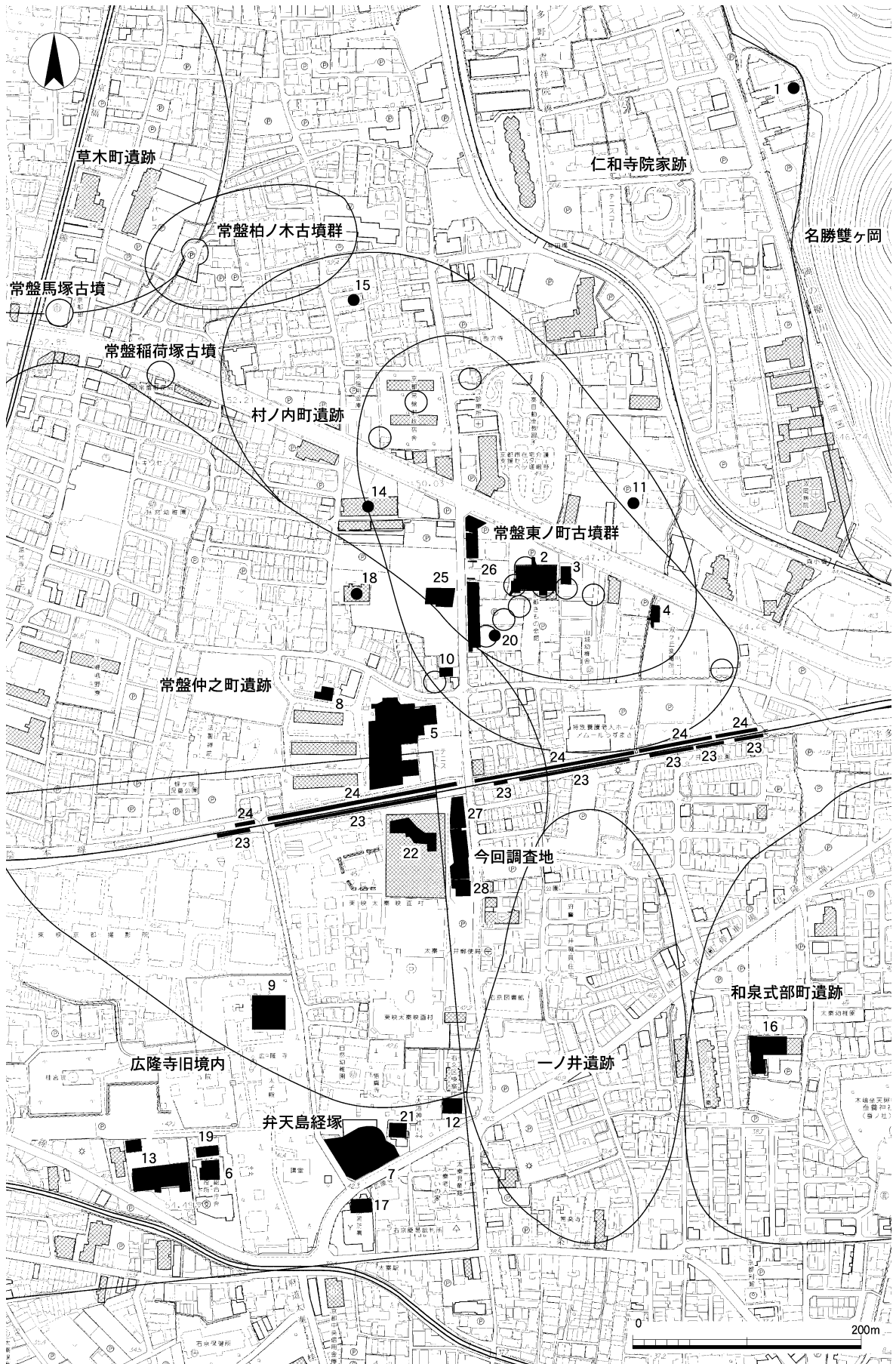


図6 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

表1 周辺の調査成果概要表

No.	調査年度	方法	調査日	弥生～飛鳥時代の主要遺構	奈良～平安時代の主要遺構	鎌倉～室町時代の主要遺構
	主要遺物			文 献		
1	1974	発掘	1974.11.01～ 1975.01.15			土師器皿の出土する窯
	古墳～飛鳥の円筒埴輪・土師器・須恵器・瓦類、平安～室町の土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦類			『平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要』『埋蔵文化財発掘調査概報集』 鳥羽離宮跡調査研究所 1976年		
2	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3		室町～江戸の土壇墓群
	土師器・須恵器			『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年		
3	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1	平安の柱穴群・土坑2	室町～江戸の土壇墓群
	弥生土器・須恵器			『平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要』『埋蔵文化財発掘調査概報集』 鳥羽離宮跡調査研究所 1976年		
4	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	包含層		室町～江戸の土壇墓群
	弥生土器・須恵器			『仁和寺子院跡』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年		
5	1974	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	古墳後期～飛鳥の堅穴住居・掘立柱建物・溝	平安の掘立柱建物・土坑・溝	鎌倉以降の土壇墓
	古墳後期～飛鳥の土師器・須恵器、平安～鎌倉の土師器・瓦器			『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年		
6	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12		奈良の土坑・基壇地業、平安の掘立柱建物、	室町の土坑
	古墳後期の円筒埴輪、飛鳥の土師器・須恵器・瓦類、奈良の土師器など			『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年		
7	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11		弁天池と中島の平安後期の経塚16基	土師器皿の出土する窯
	平安の土師器・緑釉陶器・瓦類、礫石経、経塚副葬品など			『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年		
8	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18			室町の柱穴・土坑
	土師器・須恵器			『日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査』『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年		
9	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	飛鳥の堅穴住居	平安の土坑	鎌倉～室町の柱穴・土坑
	古墳～飛鳥の円筒埴輪・土師器・須恵器・瓦類、平安～室町の土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦類			『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年		
10	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝		鎌倉の土坑2
	土師器・須恵器・瓦器・陶器			『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年		
11	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層		
	弥生土器			『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年		
12	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	飛鳥の堅穴住居・掘立柱建物	平安の掘立柱建物・柵・土坑	
	飛鳥の土師器・須恵器、平安の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦類			『広隆寺跡-右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要-』昭和55年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年		
13	1981	発掘	1981.07.13～ 1982.03.12	飛鳥の土坑	平安の土坑・溝・石敷土坑・梵鐘鑄造遺構	
	飛鳥の瓦類、平安の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白磁・製塩土器・瓦類・石製品・鑄造遺物			『広隆寺跡』『京都府遺跡調査概報』第5冊-2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年		
14	1986	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期の土坑・包含層		室町の土坑・包含層
	土師器・白磁など			『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年		
15	1986	試掘	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土坑・流路・包含層		
	土師器・陶器・瓦など			『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年		

No.	調査年度	方法	調査日	弥生～飛鳥時代の主要遺構	奈良～平安時代の主要遺構	鎌倉～室町時代の主要遺構
	主要遺物			文 献		
16	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の竪穴住居、古墳前・ 中期の竪穴住居		
	弥生中期の土器、古墳中期の須恵器・土師器など			「和泉式部町遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年		
17	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・土坑・柱穴・竈	平安の包含層	鎌倉の包含層
	飛鳥の土師器・須恵器・瓦類、平安の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦器・瓦類・金銅製仏像・銭貨・鋳型・窯壁・融着瓦・壁土など			「広隆寺旧境内1」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年		
18	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05		平安前期の土坑	
	須恵器など			『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年		
19	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	包含層	平安前期～中期の溝・土坑・柱穴	江戸の溝
	平安の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦類など			「広隆寺旧境内2」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年		
20	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1	平安の土坑2	鎌倉の土坑2
	土師器・須恵器・銭貨など			「常盤東ノ町古墳群」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年		
21	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の竪穴住居・土坑	平安中期の溝・柱穴	室町～桃山の溝
	飛鳥の土師器・須恵器、平安の土師器・須恵器・白磁・瓦類など			「広隆寺旧境内」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年		
22	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の竪穴住居4	平安の遺構	江戸の遺構
	関西文化財調査会による発掘調査実績報告					
23	2006	発掘	2006.01.20～ 2006.07.20	弥生中期の竪穴住居、古墳後期～ 飛鳥の竪穴住居	平安の溝	鎌倉の土壇墓・溝・柱列
	弥生中期の壺・甕、古墳後期～飛鳥の須恵器・土師器・石材・紡錘車・土錘、平安前期の須恵器・灰釉陶器など			『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006年		
24	2008	発掘	2008.04.11～ 2008.06.27	弥生中期の竪穴住居、古墳後期～ 飛鳥の竪穴住居・炉・土坑・ 溝・掘立柱建物	奈良～平安の掘立柱建物・溝	鎌倉時代の池・土坑
	縄文の石鏃、弥生中期の無頸壺・壺・高杯、古墳後期～飛鳥の土師器・須恵器・ガラス製品、奈良～平安の土師器・須恵器、鎌倉の土師器・滑石製釜など			『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-3（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年		
25	2008	発掘	2008.11.25～ 2009.01.14	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか		鎌倉の土坑2
	土師器・須恵器・瓦器・陶器			『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-17（財）京都市埋蔵文化財研究所 2009年		
26	2008	発掘	2008.11.10～ 2009.03.17	古墳後期～飛鳥の竪穴住居・古 墳石室	平安～室町の土坑・井戸	
	弥生・古墳・飛鳥の土器、平安～室町の土器・瓦など			『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-20（財）京都市埋蔵文化財研究所 2009年		
27	2008	発掘	2009.01.20～ 2009.03.19		奈良の掘立柱建物	鎌倉～室町の土坑・溝・落込
	奈良～室町の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・焼締陶器・青磁・白磁など			『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-21（財）京都市埋蔵文化財研究所 2009年		
28	2009	発掘	2009.12.14～ 2010.02.02	飛鳥の竪穴住居	平安の掘立柱建物・井戸	鎌倉～室町の溝・土坑・柱穴
	飛鳥～室町の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・焼締陶器・青磁・白磁など			『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-18（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010年		

点をなすものとなる可能性がある。

なお、当該地周辺の地理・歴史的環境や遺跡調査概要については、昨年度の発掘調査報告書に詳述されており、当該報告書を参照されたい。また、周辺の遺跡調査成果については、表1に概要を示した。

### 3. 遺 構

今回の調査で検出した遺構総数は 1051 基に及ぶ。時代区分としては、飛鳥から奈良時代に属するものや平安時代に属するものは少なく、大半は鎌倉時代から室町時代のものである。また、遺構の分布を概観すると、飛鳥時代から奈良時代に属するものは竪穴住居が主体で、調査区中央北部に位置する東西方向の高まり 272-3 南半に集中するが、北東端でも検出しており、調査区のほぼ全域に分布する。平安時代に属するものは、高まり 272-2 を含め、その周辺で検出したにとどまる。鎌倉時代から室町時代のもものは、北西端で検出した土坑や石組遺構を除けば、土壇墓・土坑および柱穴を含めた小土坑などは前述した高まり 272 から南側で検出した。

#### (1) 基本層序 (図版 4)

調査区は南北間で約 1 m の高低差があり、東西方向の高まりを境に堆積状況は異なる。現地表面はアスファルトであり、アスファルト下はほぼ全面にわたり碎石が敷かれる。碎石下には近代に属すると考えられる黒褐色砂泥層、近世に属すると考えられる暗褐色砂泥層などの耕作土層が堆積する。耕作土層下では主に高まり 272 の北・南で整地土層を検出した。整地土層は大別して 4 層ある。整地土層 1 は高まり北部に堆積する土層で、厚さ 0.4～0.6 m ある。上層から暗褐色砂泥・極暗褐色砂泥・黄褐色砂泥層の 3 層からなるが、西半は攪乱を受け大きく削平され、東半に残存する。出土遺物は極めて少ないが、室町時代後期のものが含まれている。整地土層 2 は高まり南部に堆積するφ 3～5 cm の礫を含むにぶい黄褐色砂泥層で、厚さ 0.1～0.2 m ある。出土遺物は鎌倉時代のもものが含まれている。この整地土層 1・2 上面を第 1 面とした。整地土層 3 は高まり南部の整地土層 2 下に堆積するにぶい黄褐色砂泥層で、厚さ 0.1～0.2 m ある。出土遺物は平安時代後期のものが含まれている。整地土層 4 は高まり北部の整地土層 1 の下層に堆積する暗褐色砂泥層で、厚さ 0.3 m ある。出土遺物は平安時代中期から後期のものが含まれている。この整地土層 3・4 上面を第 2 面とした。ただし、第 2 面に関しては、遺構の帰属時期により第 2-3 面・第 2-2 面・第 2-1 面の 3 面に分けて概述している。これら整地土層を除去すると、φ 1～5 cm の礫を多量に含む明黄褐色砂泥層やにぶい黄褐色砂泥層などの無遺物層となる。この無遺物層上面を第 3 面とした。

表 2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
飛鳥時代～奈良時代	竪穴住居、溝	
平安時代	区画施設、柱列、柱穴群、土坑、溝	
鎌倉時代～室町時代	土壇墓群、柱穴群、土坑、溝	

高まりは、上層から下層まで3面の調査を実施した。

## (2) 第3面の遺構 (図版1)

第3面とした遺構面は、整地土層3・4掘り下げ後の無遺物層上面である。調査区北端ならびに南部で飛鳥時代に属すると考えられる複数の竪穴住居ならびに溝を検出した。竪穴住居は10棟ある。竪穴住居は一辺4～5mの平面形が方形を呈するものが多いが、削平を受け、また溝などに切られていたり、さらに住居同士が重複していることもあって、残存状況は良くない。これらの住居は北でやや西に傾く類似した方向を有しており、一定の規則性がみられる。いずれも出土遺物から飛鳥時代に属する。

竪穴350 (図版9) 調査区南半の西端で検出した。方形を呈すると考えられる。西半は調査区外に広がる。検出規模は南北約3.6m、東西約2.5m以上ある。壁溝は3辺で検出した。北辺のほぼ中央に竈とみられる焼土の痕跡を検出した。また焼土北端では、火熱を受け表面が赤変した支脚石とみられる自然石と須恵器杯が出土した。支柱穴は確認できなかった。

竪穴480 (図版9) 調査区南半のほぼ中央部で検出した。長方形を呈する。南西角は中世の土坑や柱穴などに切られ、また住居内は平安時代から中世の柱穴や土坑により削平されていた。規模は東西約5.5m、南北約3.4mある。壁溝は4辺で検出した。支柱穴は4基検出した。柱間は、いずれも1.9mである。竈の痕跡とみられる焼土の痕跡を北辺中央部付近で検出した。

竪穴445 (図版9) 調査区南半の東端で検出した。方形を呈すると考えられる。東半は調査区外に広がる。規模は東西約3.5m、南北約1.5m以上ある。壁溝は北辺で検出した。支柱穴は確認できなかった。住居内からは須恵器杯・蓋が出土した。

竪穴750 (図版9) 調査区南半の東端で検出した。方形を呈すると考えられる。東半は調査区外に延び、南半は竪穴445に切られる。規模は東西1m以上、南北2m以上ある。壁溝は西辺で検出した。支柱穴は確認できなかった。

竪穴700・850・200・900・300 (図版9) 調査区南西端で重複した状態で5棟検出した。いずれも方形を呈すると考えられ、住居西半は調査区外に広がる。切り合い状況から、新しいものから700→850→200→900→300の順に古くなる。最も新しい竪穴700の規模は南北約4m、東西1.5m以上である。壁溝は西辺を除く3辺で検出している。竪穴850は南北4.5m以上、東西は竪穴700に切られ不明である。壁溝は東辺と北辺の一部が残存していた。壁溝内から須恵器杯Bと土師器甕、焼土、炭化した種実が出土している。竪穴200は前回の調査で検出していたが、北辺の壁溝と竈の痕跡とみられる焼土痕を確認した。竪穴900は東辺・北辺の壁溝の一部を検出した。残存規模は南北2.5m、東西1.5mである。竪穴300は竪穴700と竪穴850に切られ、残存規模は南北4.5m、東西は1mである。壁溝は東辺と北辺で検出した。

竪穴1051 調査区の北東端で検出した。方形を呈すると考えられる。大半は南北方向の溝292により削平を受けている。規模は南北約5m、東西は不明である。残存する西辺のほぼ中央部に竈の痕跡とみられる焼け面を検出している。

溝 802-2 (図版 9) 高まり北側の溝 802-1 の下層で検出した東西方向を示す溝である。東西は延長する。検出面での規模は幅 3.6 m、深さ 0.3 ~ 0.6 m である。底面は西から東へ向かって段状に下がり、東西端で約 0.35 m の高低差がある。東端では東西約 2.0 m、南北約 2.5 m の範囲に径 0.05 ~ 0.3 m の礫が集中する箇所がある。出土遺物には土師器・須恵器などがある。

### (3) 第 2-3 面の遺構 (図 7)

第 2-3 面とした遺構面は、整地土層 4 上面であるが、整地土層 4 掘り下げ後の無遺物層上面でも遺構を検出しており、これらの遺構もここに含めた。高まり 272-3 の北側ならびに南側でも多数の遺構を検出した。検出した遺構には、奈良時代から平安時代中期に属する区画施設 (高まり 272-3・溝など)、柱穴、溝などがある。

区画施設 (図版 10) 高まり 272-3 は東西方向を示す区画施設で、東西は調査区外へさらに延長する。検出面での規模は、幅 0.7 ~ 1.0 m である。この直上で柱穴を多数検出した。

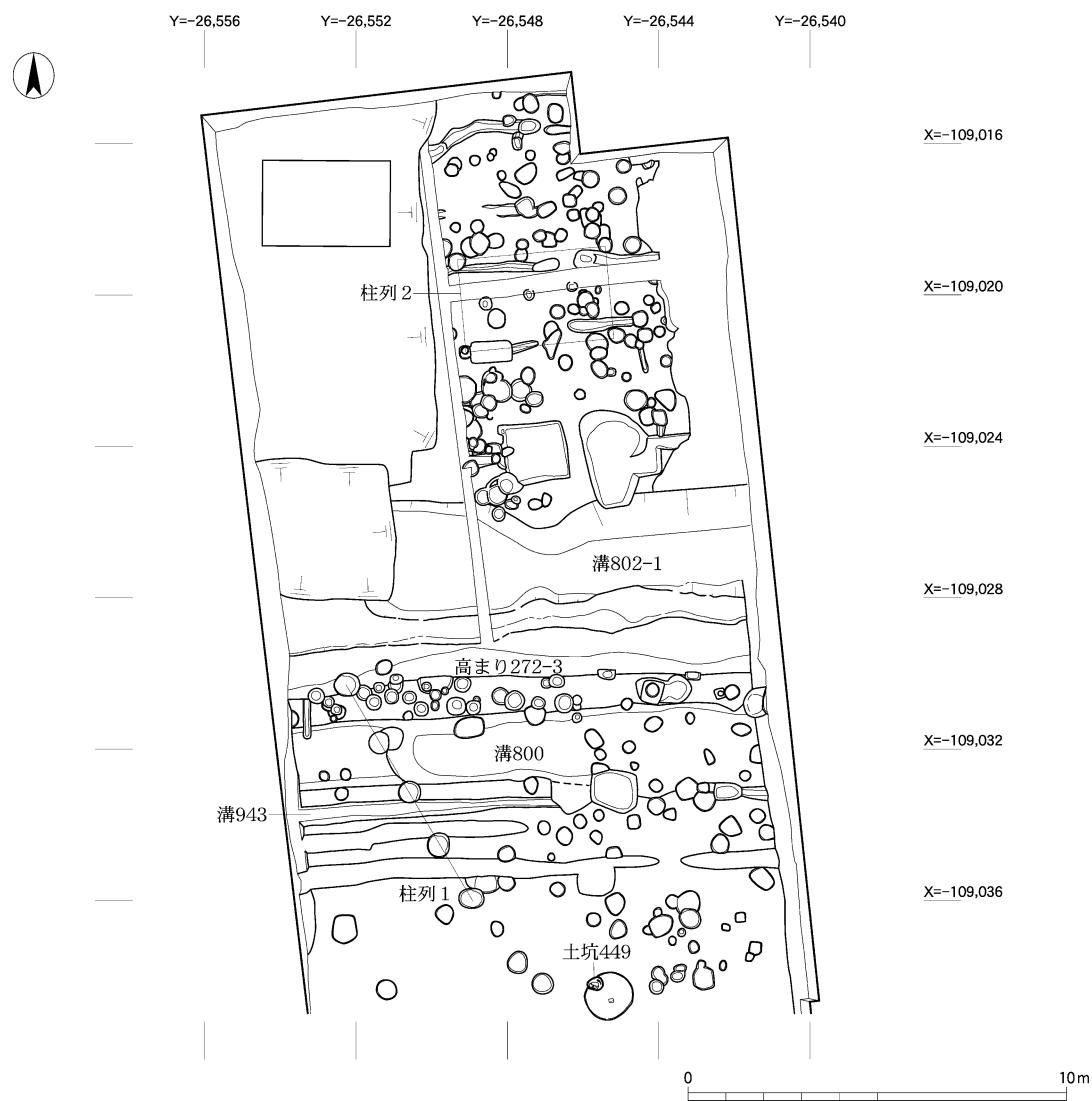


図 7 第 2-3 面平面図 (1 : 200)

高まり 272-3 の北側で溝 802-1 を検出した。東西は調査区外へさらに延長する。検出面での規模は、幅 3.4 ~ 3.8 m、深さ 0.4 m である。遺物は平安時代中期に属する土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。

高まり 272-3 の南側では溝 800 ならびに溝 943 を検出した。いずれも東西方向は調査区外へ延長する。これらの溝の方向は座標東に対して北に 3 度 ~ 4 度程度振れる。溝 800 は検出面での現存規模は、幅 1.7 m 前後、深さ約 0.4 m 前後ある。溝 943 は一部途切れるものの東西方向を示す。検出面での現存規模は、幅約 0.3 ~ 0.5 m、深さ約 0.1 m 前後ある。溝 800・溝 943 とも遺物は細片であるが、平安時代中期に属すると考えている。

柱穴群（図版 10、図 8）柱穴群は、高まり 272-3 の南側・上面・北側に分布する。

高まり直上から南側にかけて検出した柱穴群は、70 基前後であった。各柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、径 0.2 ~ 0.6 m である。建物としてはまとまらないが、柱列が確認できるものもある。一例として、柱列 1 は柱穴 954 - 柱穴 957 - 柱穴 958 - 柱穴 927 - 柱穴 930 からなる柱列で、柱間は約 2.0 m である。検出面での規模は、径 0.5 ~ 0.7 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m あり、主軸方向は座標北から西へ約 30 度振れる。遺物は土師器・須恵器の細片が出土しているが、時期は不明である。しかし、主軸方向の振れから奈良時代に属すると考えている。この他、柱列 1 に近

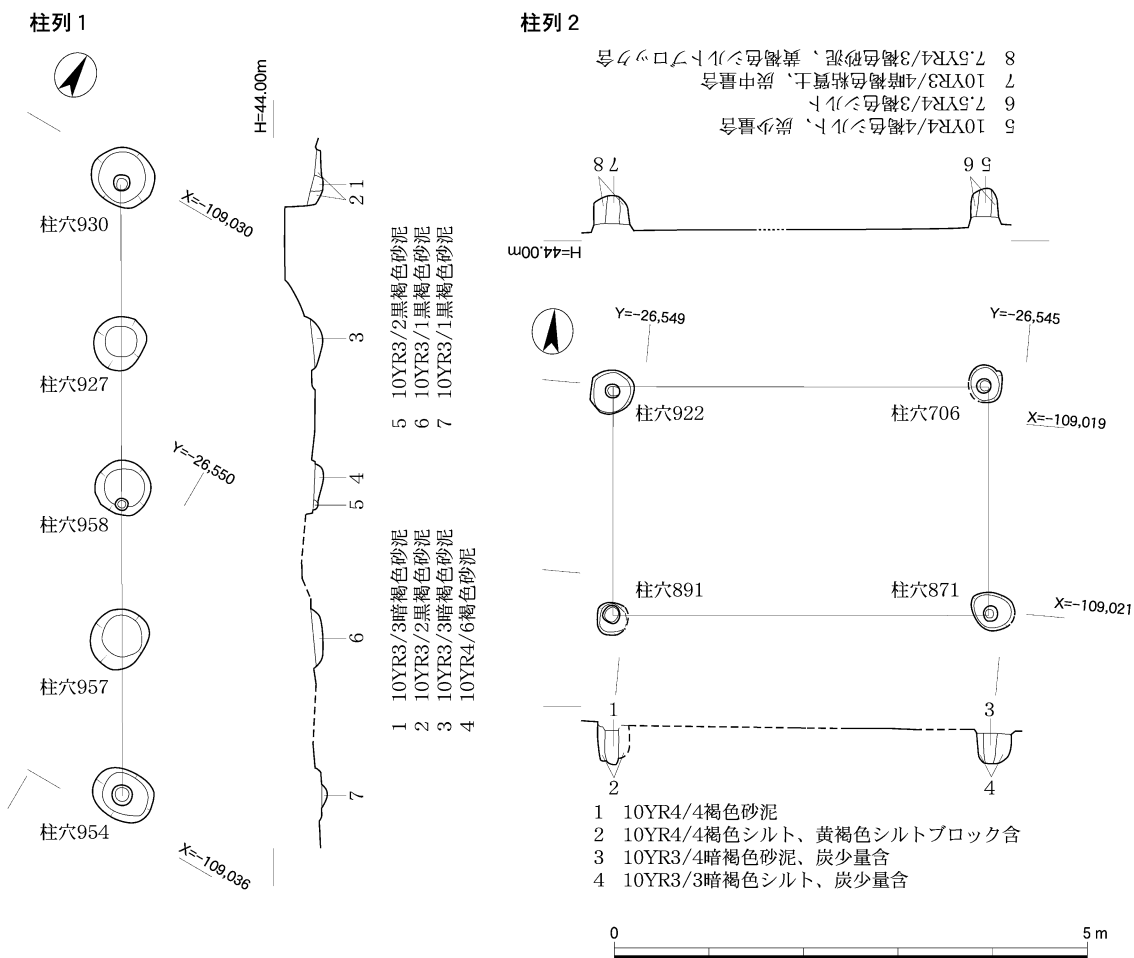


図 8 柱列 1・2 実測図 (1 : 80)

接して直交する柱の並びを検出しているが、建物としてはまとまらない。

高まり 272-3 上面で検出した柱穴群は、30 数基であった。各柱穴の平面形は、円形を呈し、径 0.2 ～ 0.5 m ある。柱穴の並びは不明であるが、高まり 272-3 上面に集中する傾向にあり、高まり 272-3 に伴う柵や塀などの柱穴群であると考えている。遺物は大半が細片であるが、平安時代中期と考えている。

高まり 272-3 北側で検出した柱穴群は、100 基前後であった。各柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、径 0.2 ～ 0.6 m ある。柱列が確認できるものがあり、一例として、柱痕跡を有し、深さのある柱穴 706 - 柱穴 871 - 柱穴 891 - 柱穴 922 を柱列 2 とした。掘立柱建物の一部と考えられるが、周辺には展開せず柱列とした。柱間は、東西約 4.0 m、南北約 2.4 m、深さ 0.35 ～ 0.45 m ある。柱痕跡はすべての柱穴で検出でき、径 0.15 m 前後ある。主軸方向は座標北から西へ約 6 度振れる。平安時代中期の土器類が出土した。

土坑 449 (図版 6・10) 高まり 272-3 南側で検出した地鎮を目的としたと考えられる土坑である。平面形は楕円形を呈する。検出面での規模は、長軸 0.46 m、短軸 0.35 m、深さ 0.2 m ある。土坑中央部に須恵器壺を正位置で据え、口縁部上端に長径 0.2 m の河原石を用いた蓋石を被せる。壺の周囲には土師器皿 9 枚を中心に向かって傾けた状態で埋納する。壺の口縁部は土圧によって破損していたが、検出時の壺内上部には空隙が遺存していた。壺内からは、上部から土製小玉 4 個体、小玉下から銭貨「延喜通寶」約 44 枚および穿孔のある鉛ガラスの小玉 1 個体が出土した。

#### (4) 第 2-2 面の遺構 (図 9)

第 2-2 面とした遺構面は、整地土層 3・4 上面であるが、高まり 272-2 南側では整地土層 3 上面で遺構検出を行ったが十分に検出することはできず、整地土層 3 を掘り下げた後の無遺物層上面で検出した遺構も含めている。検出した遺構には、主に平安時代後期に属する区画施設 (高まり 272-2・石敷 853・溝 797 など)、柱穴、耕作溝群などがある。

耕作溝群 高まり 272-2 の北側、整地土層 4 上面で検出した溝である。概して東西方向を示すが、南北方向を示すものもある。9 条検出した。主軸方向は座標東に対して北へ 3 ～ 5 度振れる。東西はさらに延長すると考えられるが、後世の遺構によって削平を受ける。検出面での現存規模は、幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.05 m 前後ある。遺物は細片であるが、平安時代後期に属すると考えている。

区画施設 (図版 11) 高まり 272-2 は東西方向を示す区画施設で、東西は調査区外へさらに延長する。検出面での規模は、幅 1.2 ～ 1.4 m ある。

高まり 272-2 北側の溝 802-1 は高まり 272-3 と同時期のものと考えている。

高まり 272-2 の南側では溝 797 を検出した。東半の肩口は不明瞭であったが、東西は調査区外へさらに延長する。主軸方向は座標東に対して北に約 5 度振れる。検出面での現存規模は、幅 1.4 m 前後、深さ約 0.3 m 前後ある。遺物は細片であるが、平安時代後期に属すると考えている。

石敷 853 は上層の路面 793 を掘り下げた面で検出した東西方向の溝状を呈する遺構である。東は調査区内で肩口が立ち上がり、西は調査区外へ延長する。検出面での現存規模は、幅 0.6 m、



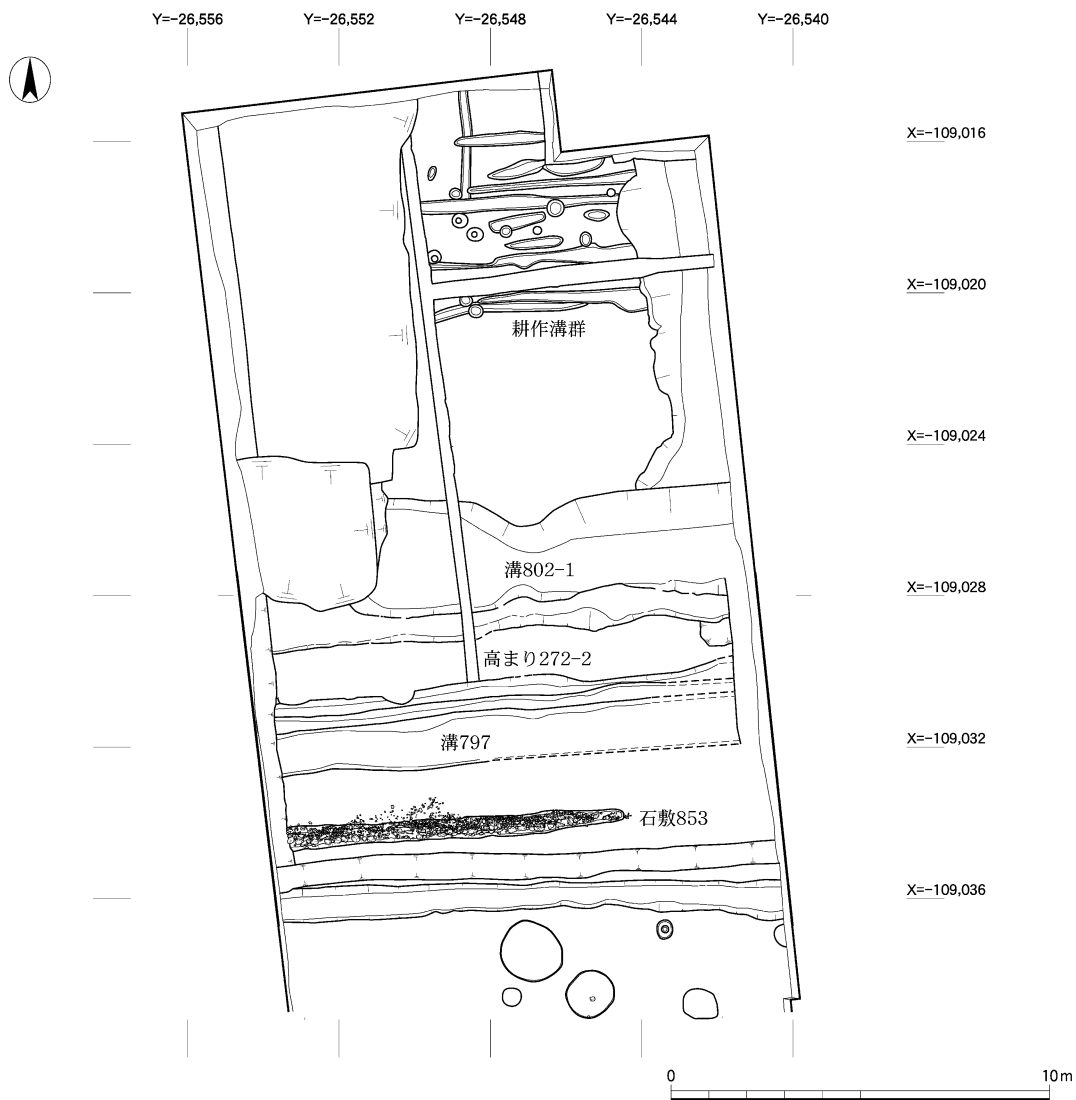


図9 第2-2面平面図(1:200)

深さ0.2m前後ある。遺構内は径0.02～0.27mの礫が多量に詰まり、特に南肩口に沿って径0.1～0.27mの礫が列をなす。溝の北寄りからは、奈良時代から平安時代中期に属すると考えられる須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などの破片が比較的多数出土した。

#### (5) 第2-1面の遺構(図版2・12)

第2-1面とした遺構面は、整地土層3上面である。第2-1面とした遺構には、第2-2面で検出した以外の遺構であり、区画施設(高まり272-1・石組790・石敷784・路面793・溝412・500など)、柱穴、土坑などがある。

柱穴群 高まり272-1の南側ほぼ全域で240基前後の柱穴を検出した。建物などとしてまとまるものはない。平面形は円形のものが多いが、方形のものもある。検出面での規模は、径0.25～0.5m、深さ0.12～0.35mである。遺物は細片が多いが、平安時代中期から平安時代後期に属すると考えている。

土坑群 高まり 272-1 の南側ほぼ全域で検出した。20 数基前後ある。建物などとしてまとまるものはない。平面形は方形・円形・楕円形を呈する。検出面での規模は、径 1.0 ～ 1.8 m、深さ 0.15 ～ 0.45 m である。なかには柱痕跡があるものもあり、径 0.12 m 前後ある。遺物は細片が多いが、平安時代中期から平安時代後期に属すると考えている。

区画施設(図版 5・13) 高まり 272-1 は調査区中央北側で検出した、東西方向を示す遺構である。径 1 ～ 2 cm の礫を含む褐色砂泥や径 1 ～ 3 cm の礫を含む暗褐色砂泥で盛り上げ土手状に高める。当該地を南北に区画する施設であると考えられる。西は調査区外へ延長し、東は後世の遺構によって削平を受ける。検出面での現存規模は、幅約 1.3 m、後述する路面からの高さ 0.3 m 前後ある。高まり 272-1 の主軸方向は、下記の遺構も含めて座標東に対して北に約 5 度振れる。

高まり 272-1 の北側で石敷 784 を検出した。東西は調査区外へ延長する。北肩口は溝 290 によって削平を受ける。高まり 272-1 の北斜面に径 0.04 ～ 0.25 m の礫を多量に用いて貼り付けた状態を呈する。検出面での現存規模は、幅 0.7 m、深さ 0.3 m である。礫間には板材などが燃えた炭が比較的少量に分布しており、石敷 784 上面は土層に覆われることなく礫敷き状態のままであったことが窺われる。したがって、築地などの上部構造からの雨水を受ける雨落溝などの用途が想定できる。

一方、高まり 272-1 の南側では石組 790 を検出した。東は攪乱や後世の遺構によって削平を受け、西は調査区外へ延長する。高まり 272-1 上面から掘形を掘り、底面から約 0.2 m 埋め戻した後、長径 0.1 ～ 0.3 m 前後の礫を 2 ～ 3 段積み上げる。検出面での現存規模は、幅約 1.0 m、深さ 0.4 m である。築地などの下部構造を構成する遺構の可能性はある。

石組 790 に南接して溝 500 がある。東西は調査区外へ延長する。検出面での規模は、幅約 0.8 m、深さ約 0.4 m である。平安時代後期に属する遺物が出土した。

溝 500 に南接して路面 793 がある。東西は調査区外へ延長する。路面は小礫と土砂を用いて堅固に叩き締める。厚さは 0.04 m 前後ある。一部礫敷きが面的に剥がれる箇所があり、補修した痕跡と考えられる。出土遺物は細片であるが、平安時代後期に属すると考えられる。

溝 290 は石敷 784 が埋没したのち上面に形成された溝で、高まり 272 北側では整地土層 1 を除去した面で検出した。西は調査区外へ延長する。調査区西端から中央部までは東西方向を示し、



図 10 溝 290 礫群検出状況



図 11 溝 290 凝灰岩片検出状況

中央部から東側ではほぼ直角に北折し調査区外へ延長する。東肩口は調査区外へ広がる。底面の高さは、南北方向では約 0.2 m 南へ下がり、東西方向では約 0.1 m 東へ下がる。検出面での現存規模は、幅約 3.1 m、深さ約 0.7 m 前後ある。溝の底面には図 10 に示したように長軸 0.5 m を越えるような割石などが重なる箇所がある。また、図 11 に示したように面を残した凝灰岩の破片が各地点に分布していた。出土遺物から平安時代後期に属すると考えている。

溝 412 は路面 793 に並行する東西溝である。東西は調査区外へ延長する。検出面での規模は幅約 0.9 m、深さ約 0.3 m である。遺物は細片が多いが、平安時代後期に属すると考えられる。

## (6) 第 1 面の遺構 (図版 3・14)

第 1 面の遺構は、主に高まり 272 の北側と南側で検出した、鎌倉時代から室町時代に属する遺構である。高まり 272 から北側では整地土層 1 上面で大規模な土坑と石組遺構ならびに礎石を検出したが、他に顕著な遺構はなく遺構数は極めて少ない。石組遺構は、火葬用の台と考えられ、大規模土坑と共存する遺構である。また、整地土層 1 上面には礎石がある。高まり 272 から南側では整地土層 2 上面で土坑・柱穴・溝などの遺構をほぼ全域にわたり検出し、高まりを挟んで南北での遺構分布に顕著な差異があることが窺われる。高まり 272 南縁部では東西方向を示す溝 291 があり、当該期においても高まりが境界を意識したことが窺われる。土坑は高まり 272 南側で多数検出している。中には蔵骨器を納めるものや、鉄釘が出土しているものもあり、火葬墓や土壙墓などが造られていたことを示している。柱穴はほぼ全域で検出した。中には底面に根石を据えるものもあるが、建物としてはまとまらない。

高まり 272 高まり 272 は東西方向を示す高まりである。東西へはさらに延長する。にぶい黄褐色砂泥層・褐色砂泥層・暗褐色砂泥などの土層を厚さ 0.2 ～ 0.4 m 積み上げて敷設する。X=-109,031 から溝 412 間の幅約 4.0 m は、拳大の礫を多量に包含しており、道路敷状を呈する。検出面での規模は、幅約 4.5 m である。遺物は細片であるが、鎌倉時代と考えている。

土坑 15 (図版 7) 南半部東で検出した東西方向の方形土坑である。掘形の規模は東西 1.8 m、南北 1.1 m である。南辺寄りに方形を呈した主体部がある。規模は南北 0.3 m、東西 1.3 m、深さ 0.1 m である。埋土は暗褐色砂泥であるが、西端には炭を含む褐色系の砂泥が堆積する。北辺中央には拳大の石が 3 石残存していた。内には土師器皿のほぼ完形が散在していた。

土坑 30・277 (図版 6) 南半部東で並列した状態で検出した、いずれも楕円形の土坑である。土坑 30 は南北 1.4 m、東西 1.5 m、深さ 0.1 m である。底面北西には礫が集中していた。埋土は炭を含む暗褐色砂泥である。埋土からは土師器皿片と鉄釘が出土している。土坑 277 の規模は南北 0.7 m、東西 0.75 m、深さ 0.3 m である。底面には礫が散在する。埋土は炭を含む暗褐色砂泥である。埋土からは土師器皿片と鉄釘が出土している。

土坑 58・59・108 (図版 7) 南半部東で 3 基を重複した状態で検出した。土坑 59 は方形を呈しており、規模は南北 1 m、東西 0.7 m、深さ 0.1 m である。埋土は 2 層に分かれ、いずれも炭と小礫を含む暗褐色砂泥とにぶい黄褐色砂泥である。土坑 58 は楕円形で土坑 59 に北西端を切ら

れ、削平されていた。規模は南北 1.1 m、東西 1.2 m、深さ 0.1 m である。底面中央に角礫が弧状に並ぶ。土坑 108 は楕円形で東半部を土坑 58・59 に切られ、削平されている。規模は南北 1.7 m、東西 0.8 m 以上、深さ 0.1 m である。埋土は炭と礫を含む褐色砂泥である。

土坑 90 (図版 6) 南半部東で検出した方形土坑である。土坑 148 と並列して検出した。規模は南北 1.6 m、東西 1.8 m、深さ 0.2 m である。埋土は 2 層に分かれ、炭を少量含むにぶい黄褐色砂泥である。

土坑 100・278 (図版 6・15) 南半部西で重複して検出した。いずれも不整形な土坑である。土坑 100 の規模は南北 0.9 m、東西 6.5 m、深さ 0.4 m である。埋土は 2 層に分かれる。上層には土師器皿の完形が複数重なった状態で出土した。また灰釉系壺のほぼ完形が中央部に、正位の状態で出土した。壺の周囲には焼土と礫がみられた。土坑 278 は土坑 100 に切られた状態で検出した。規模は南北 1.0 m、東西 0.4 m 以上、深さ 0.1 m の規模である。埋土は炭を少量含む暗褐色砂泥である。埋土と底面には土師器皿の完形が多く鉄釘も出土した。

土坑 102 (図版 6・15) 南半部西端の溝 20 底面で検出した楕円形の土坑で、規模は南北 0.5 m、東西 0.7 m、深さ 0.2 m である。土坑内からはいずれも完形の土師器皿 4 個、瓦器椀 1 個と瓦器羽釜の上半部、鉄製の小刀が出土した。

土坑 148 (図版 6・15) 南半部東の土坑 90 に西接して検出した。ほぼ方形の土坑である。規模は南北 1.7 m、東西 1.4 m、深さ 0.2 m である。埋土は砂泥ブロックを多く含むが、主体は炭を少量と礫を含む褐色砂泥である。埋土からは瓦器羽釜と土師器皿片が出土した。

土坑 154 (図版 7) 南半部の北東で検出した方形の土坑である。規模は南北 1.2 m、東西 1.4 m、深さ 0.1 m である。埋土は炭を少量含む礫混じりの暗褐色砂泥である。埋土からは瓦器羽釜と土師器皿片が出土し、底面では土師器皿と鉄釘などがみられた。

土坑 268 (図版 7・15) 高まり 272 の南東斜面で検出した石組土坑である。方形の掘形をもち内側を横長の石で囲む。全体の規模は南北 1.1 m、東西 1.8 m、深さ 0.35 m である。埋土は 2 層に分かれる。上層は灰黄褐色砂泥、下層は暗褐色砂泥で、上・下層からは土師器皿片と鉄釘が出土している。

土坑 276 (図版 7) 高まり 272 の南で、土坑 268 の南西で検出した方形土坑である。規模は南北 1.2 m、東西 0.5 m、深さ 0.1 m である。埋土は暗褐色砂泥である。埋土内から土師器皿片と鉄釘が出土した。

土坑 282 (図版 7) 南半部の西側、溝 20 の北で検出した不整形の土坑である。規模は南北 1.1 m、東西 1.0 m、深さ 0.1 m である。底面には礫が多くみられた。

土坑 132 (図版 8・16) 調査区中央北端で検出した土坑である。西側は攪乱によって削平を受ける。北は調査区外へ広がり、2008 年度調査の落込 29 に連続する。2008 年度調査分を含めれば、南北長は約 10 m 以上に達する。東肩口と南肩口の一部を検出した。平面形は緩やかな弧状を呈する。肩口から底面にかけて緩やかに傾斜し、傾斜面には小礫が比較的密に分布する。検出面での現存規模は、南北約 3.5 m、東西約 3.0 m、深さ 0.3 ~ 0.5 m である。底面には後述する石組 250

が据えられる。土層は下層から中層にかけて灰・炭層が厚く堆積し、肩口周辺にかけて厚く堆積する傾向が窺える。出土遺物には土師器・輸入陶磁器・鉄釘・人骨などの小片と炭化材や炭化コメ果実があり、土器類の形態から室町時代後半に属すると考えられる。また、底面に密着して長さ 0.1 m・0.18 mの棒状鉄製品が 2 個体出土した。

石組 250 (図版 8・16) 調査区中央北端の土坑 132 底面で検出した石組遺構である。北は調査区外へ広がる。チャート・泥岩・珪岩など近隣で採取できる角礫や川原石などを用いて組み上げ、検出時の状態で 2 段の石組が遺存していた。石組の平面形は方形を呈するが、石組は北壁際で一旦途切れている状態から、同様の規模の石組が北側にあるとすれば、中央が途切れる南北に長い石組の可能性もある。検出面での現存規模は、東西・南北とも約 0.6 m、高さ約 0.2 mある。

石組の表面は熱を受け赤変している。また、底面にも熱を受けて赤変する箇所がある。石組内部や周辺には灰・炭が堆積し、鉄釘・骨の細片が複数出土した。骨の分析結果によれば、人骨の背骨や指骨があり、骨の表面に亀裂があることが明らかになった(自然遺物参照)。したがって、この石組は木棺を載せる台であり、火葬に伴う遺構であることが判明した。また、石組 250 直上の北壁断面には、石組 250 とほぼ同様の形態を示す 2 段に組み合わせる石が遺存しており、石組 250 の廃棄ないし多量の灰・炭などの堆積物による埋没後に新たに作られた、石組 250 と同様の機能を備えた石組の可能性が高いと考えている。出土遺物から、室町時代後期に属すると考えられる。

礎石 280 (図 12) 調査区北東部、整地土層 1 の上面で検出した花崗岩を使用した礎石である。掘形は西肩口が攪乱で削平を受けるもののほぼ円形を呈し、検出面での現存規模は、径約 0.8 m、深さ約 0.3 mある。掘形の中央部に、長径約 0.7 m、短径約 0.6 m、高さ約 0.3 mの礎石を据える。礎石下に礫は詰めていない。礎石上端面は平坦面を呈し、礎石の中央部は平面形が円形の窪みを有する。窪みは底面に向かってすぼまり、径約 0.2 m、深さ 0.15 mある。窪みの側面ならびに底面は平滑ではない。掘形から遺物は出土していないが、層位から土坑 132 と同時期と考えられる。

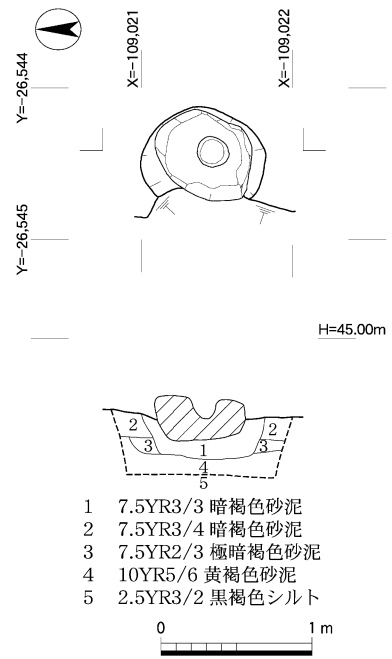


図 12 礎石 280 実測図 (1 : 50)

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要

出土した遺物は整理箱 34 箱で、弥生時代から近世までである。出土遺物には土器類、瓦類、石製品、金属製品などがある。遺物の大半は土器類が占める。土器類には弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、飛鳥時代の土師器・須恵器、平安時代以降の土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、須恵器系陶器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器などがある。瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。石製品には鍋、砥石がある。金属製品には銭貨、鉄釘、刀子がある。以下に時期別に主要遺構の出土遺物を中心に述べる。

### (2) 飛鳥時代の遺物

竪穴 350 (図版 17、図 13) (1) は須恵器杯 A である。口径 11.0 cm、器高 4.0 cm。平らな底部から斜め上方にのびる体部をもつ。内外面ともにナデ調整で、底部はヘラ切りの後、ナデ調整している。

竪穴 850 (図版 17、図 13) (2) は須恵器杯 B である。口径 15.5 cm、器高 4.0 cm である。平坦な底部で高台は外に張り出す。高台端面はやや凹みがみられる。底部から体部はへ丸みを持ちながら外上方に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。口縁部には歪みがみられる。(3) は土師器甕である。口径 23.6 cm、器高は 15.6 cm 以上である。長胴型を呈し、頸部は屈曲し内側に内湾する。口縁部は内傾し端部は面をなす。体部・頸部は内外面ともにハケ目を施す。

竪穴 445 (図版 17、図 13) (4) は須恵器杯 A である。口径 12.5 cm、器高 3.6 cm である。平らな底部から斜め外方にのびる体部をもつ。内外面ともにナデ調整で、底部はヘラ切りの後、ナデ調整している。(5・6) は須恵器杯 B 蓋である。5 は口径は 15.0 cm、器高は 1.8 cm 以上であ

表 3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
飛鳥時代	土師器、須恵器		土師器 2 点、須恵器 10 点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦器、瓦、銭貨、土玉、ガラス玉		土師器 23 点、須恵器 4 点、緑釉陶器 3 点、灰釉陶器 4 点、輸入白磁 2 点、輸入青磁 1 点、軒丸瓦 6 点、軒平瓦 5 点、銭貨 44 点、土玉 4 点、ガラス玉 1 点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、灰釉系陶器、瓦、鉄製品、銭貨		土師器 31 点、瓦器 4 点、灰釉系陶器 1 点、鉄製品 1 点、銭貨 1 点		
合計		43 箱	147 点 (3 箱)	40 箱	0 箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より 9 箱多くなっている。

る。宝珠つまみを欠損している。天井部は平坦で口縁部は外方にのびる。内外面ともにナデで調整している。6は緩やかにふくらむ天井部に平坦な宝珠つまみが付く。口縁部は欠損しており不明である。天井部の外面はヘラケズリを施す。つま

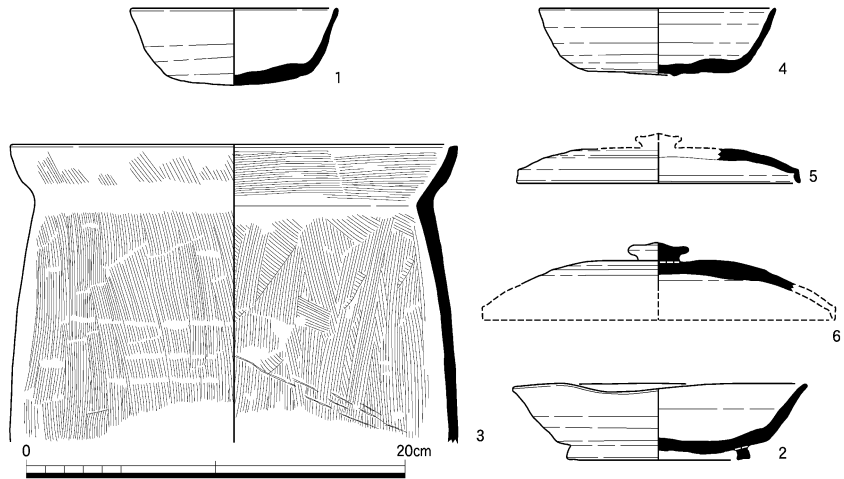


図13 竪穴 350・445・850 出土土器実測図(1:4)

み貼り付け後はナデで調整している。内面はナデで調整している。

溝 802 (図版 17) 破片を写真掲載した。(69)は土師器皿である。体部から口縁部にかけて直線的に開く。口縁端部は肥厚する。全体にヘラミガキが施されている。(70～74)は須恵器片である。70～72は杯蓋である。70は天井部外面につく扁平な宝珠つまみである。71は身受けの返りがない杯蓋である。72は天井部外面をヘラケズリし、ほかはロクロナデを施す。口縁部内面の返り先端は口縁部下方に突出する。外面には淡灰色の自然釉が全面に付着する。73は壺の高台で外に踏ん張るタイプである。74は高杯脚部で2条の凹線がみられる。

### (3) 平安時代の遺物

土坑 449 (図版 18、図 14) 完形の土師器皿 9 枚と須恵器壺が出土した。土師器皿は口径が 11.0～11.6 cm、器高 1.2～1.6 cm の小型の皿 A (7～13) と、口径が 15.0～15.2 cm、器高 2.3～2.5 cm の中型の皿 A (14・15) がある。いずれも薄手で口縁部につよいナデを施す、いわゆる「ての字状口縁」を有し、体部には指頭圧痕がみられる。須恵器壺 (16) は口径 5.5 cm、器高 11.9 cm である。底部は平坦で広く、体部は中位でふくらみ、丸い肩をもつ。底部外面は糸切りで未調整である。他はナデで調整している。胎土は軟質である。丹波・篠産とみられる。須恵器壺内からは銭貨「延喜通寶」(初鑄 907 年) が 44 枚 (金 2～45)、表面を堅く丸めた土製で径 2.0 cm の小玉が 4 個 (土 1～4)、鉛ガラス製で径 0.6 cm の玉に径 0.3 cm 程の小孔を穿った小玉 1 個 (ガ 1) が納められていた。銭貨は全体に損傷が著しく、実測・拓本などの図化はできなかった。京都Ⅲ期中 (10 世紀後半) に属する。

石敷 853 (図版 17) (75～77) は土師器片である。いずれも薄手で口縁部につよいナデを施す、いわゆる「ての字状口縁」の皿である。(78～80) は緑釉陶器片である。78 は皿の高台部である。やや軟質で全面に濃緑色の釉を施し、高台は貼付である。79・80 は碗の高台部である。軟質で貼付け高台と底部外面には糸切り痕がみられる。高台底部以外は濃緑色の釉を施す。いずれも美濃か近江産とみられる。(81・84・85) は須恵器片である。81 は壺の口縁部と頸部である。84・

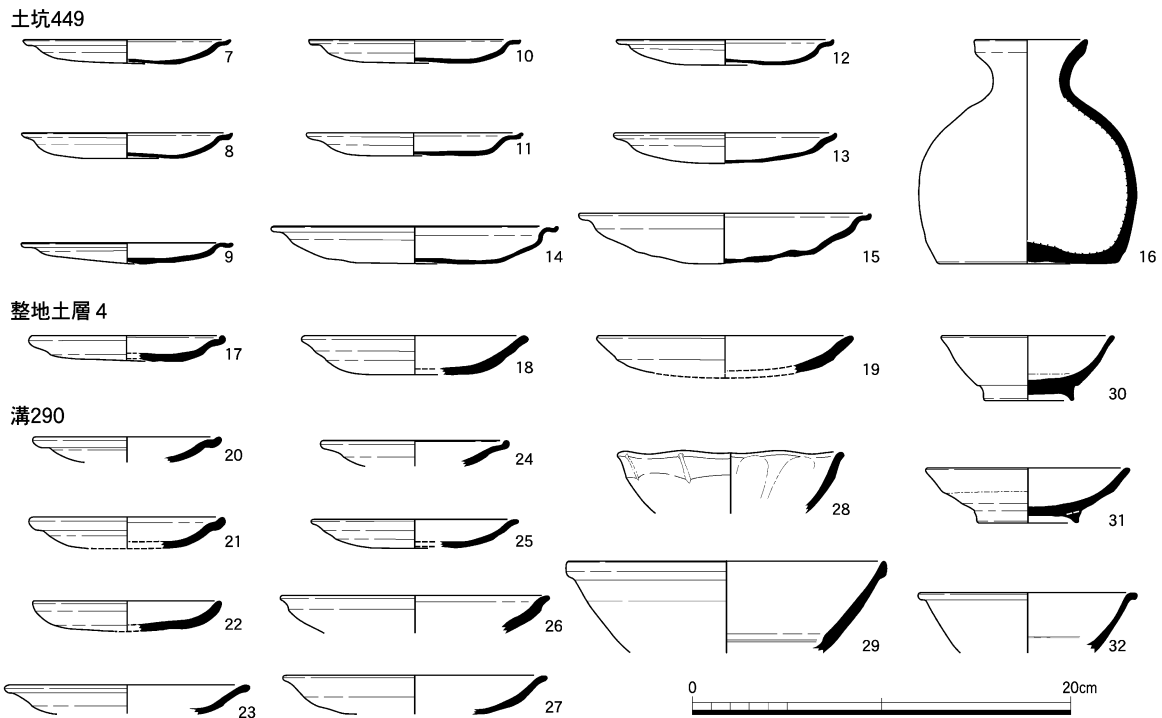


図 14 土坑 449・整地土層 4・溝 290 出土土器実測図（1：4）

85 は甕の体部片で、いずれも格子目のタタキ痕がみられ、85 の内面にはタタキの当て板痕が残る。(82・83) は灰釉陶器壺の破片である。82 は体部で茶灰色の釉を施している。83 は肩部で緑灰色の釉を施す。京都Ⅲ期新（10 世紀後半～11 世紀初頭）に属する。

整地土層 4（図 14）（17～19）はいずれも土師器皿である。17 は皿 A で口径 10.4 cm、器高 1.5 cm である。口縁部がやや屈曲し端部は丸いタイプである。口縁部内外面はナデで調整し、体部・底部外面はオサエ調整。18・19 は皿 B で口径は 12.0 cm・13.6 cm、器高はともに 2.0 cm である。口縁部が斜め外方にのびるタイプである。ナデとオサエで調整。京都Ⅳ期中（11 世紀中頃）に属する。

溝 290（図 14）（20～27）は土師器皿である。20・21・24 は口径 10.0～10.4 cm、器高 1.3～1.6 cm の小型の皿 A である。いずれも口縁部は屈曲して外上方にのび、二重のナデ痕を残す。22・25 は口径 10.0 cm・11.0 cm、器高はいずれも 1.6 cm の小型の皿 N である。口縁部は斜め上方にのびる。口縁部内外面はともにナデによる、体部外面はオサエによる調整である。23・26・27 は口径 13.0～14.2 cm、器高は 1.5 cm 以上の中型の皿 N である。口縁部は斜め上方にのび、端部を丸く収める。調整は小型の皿 N と同様である。(30・31) は小型の灰釉陶器碗である。30 は口径 9.2 cm、器高 3.4 cm で底部外面を除いて灰白色の釉を施す。31 は口径 10.8 cm、器高 3.0 cm で口縁部内外面に灰白色の釉を施す。輸入陶磁器には白磁碗（28・29）と青磁碗（32）がある。28 は口縁部四方をヘラにより、縦に切り込みをいれて輪花とし、灰白色の釉を全面に施す。29 は口縁部外面と内面に灰白色の釉を施す。口縁部は丸く折り返され玉縁状を呈する。32 は口縁・体部内外面ともに青灰色の釉を施す。口縁部は外方にのび端部は丸くおさめる。また、溝上層からは焼けた壁土が出土した。京都Ⅳ期新（11 世紀後半）に属する。



#### (4) 鎌倉時代の遺物

土坑 278 (図版 20、図 15) (33 ~ 48) は土師器皿である。33 ~ 40 は口径が 6.5 ~ 7.9 cm、器高が 1.0 ~ 1.8 cm と小型である。33・34 は口縁部を内側に折り曲げたコースター形の皿 Ac である。35 ~ 39 は口縁部が外反しナデ痕を残す皿 N である。41 ~ 44 は口径が 10.6 ~ 13.0 cm、器高が 2.0 ~ 3.0 cm の中型の皿 N である。45・46 は口径 15.8 cm・16.2 cm、器高 2.5 cm・2.4 cm

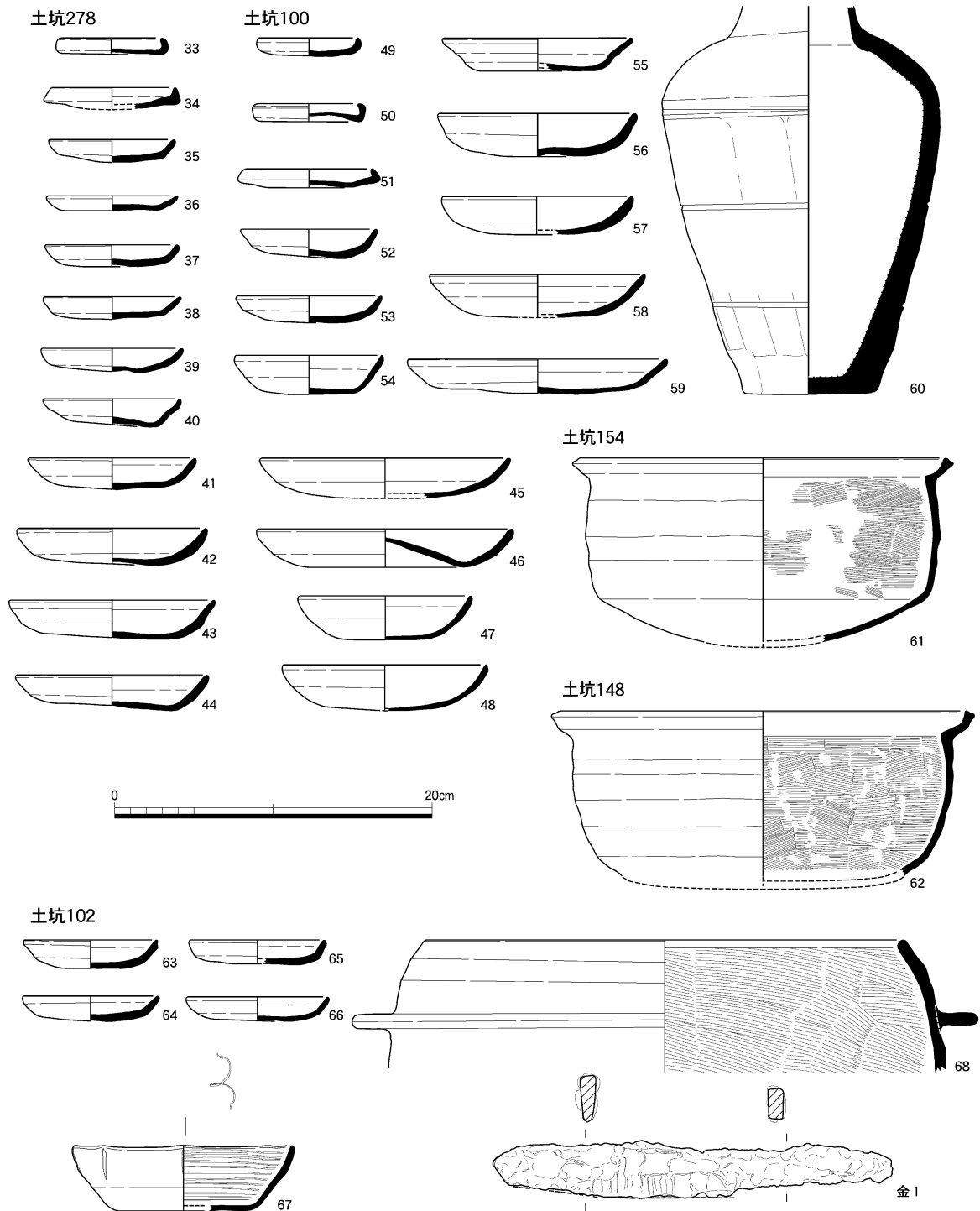


図 15 土坑 100・102・148・154・278 出土遺物実測図 (1 : 4)

の大型の皿 N である。46 は内面底部が大きく盛り上がる。47・48 は口径 11.0 cm・13.0 cm、器高 2.7 cm・2.9 cm の白色系の皿 S である。椀状の器形で、口縁部はナデで調整。京都VI期古（13世紀初頭）に属する。

土坑100(図版19、図15) (49～59)はいずれも土師器皿である。49～51は口径が6.4～8.1 cm、器高が1.2 cmの小型の皿 Ac である。口縁部を内側に折り曲げたコースター形である。52・53は口径が8.6 cm・9.1 cm、器高が1.7 cm・1.8 cmの中型の皿 N である。口縁部はやや斜め上方にのび、口縁部外面は1段ナデによる調整である。54は口径9.3 cm、器高2.5 cmの皿 S である。白色の胎土をもつ椀状の器形で、口縁部は横ナデ、体部はオサエにより調整する。55～59は口径12.0～16.0 cmの大型の皿 N である。(60)は灰釉系陶器の壺である。口縁部は欠損する。残存器高は24.4 cm。外面の肩部に灰白色の自然釉がみられる。肩部外面下半には2条の凹線、胴部と体部下外面には1条の凹線が刻まれている。壺内には銭貨「紹聖元寶」(初鑄1094年)1枚が納められ、銭表面に稲の籾殻片が付着していた。籾殻は炭化していないことから、銭貨の下に敷かれていたと考えられる。銭貨は全体に摩耗が著しく、図化はできなかった。京都VI期中（13世紀前半）に属する。

土坑154(図版19、図15) (61)は瓦器鍋である。口径23.2 cm、器高11.5 cmである。受け部は「く」の字形を呈する。口縁部内外面はナデを施し体部外面はオサエ調整、内面はハケで調整する。外面体部の下半には煤が付着している。京都VII期古（13世紀後半）に属する。

土坑148(図版19、図15) (62)は瓦器鍋である。口径25.8 cm、器高10.4 cmである。受け部はく」の字形を呈する。口縁部内外面はナデを施し体部外面はオサエ調整、内面は丁寧にハケで調整する。外面体部には煤が付着している。京都VII期古（13世紀後半）に属する。

土坑102(図版20、図15) (63～66)は土師器皿である。口径が8.4～9.0 cm、器高が1.6～1.8 cmで小型の皿 N である。いずれも体部は内湾し、口縁端部は面をもち上方に収める。口縁部の横ナデ調整は一段である。瓦器には椀、羽釜がある。(67)は椀で、口径14.0 cm、器高4.1 cmで、内湾する体部をもち、高台がつかない。内面底に暗文がみられ、体部は縦に切り込みを入れて輪花とする。体部外面はオサエのみで口縁部は横ナデ調整する。内面は工具を回転させたヘラミガキを施す。内底面の暗文は花文とみられる。(68)は羽釜である。口径は30.6 cm、器高は8.1 cm以上。口縁部は長く内傾し、鐔は水平に張り出す。外面の口縁と鐔は横ナデ調整する。内面は横ハケで調整。(金1)は鉄製の刀子である。全体の残存長は25.2 cm。破断面で確認できた刃の厚さは最大で1.5 cm。全体に錆が進行し、茎部と刃との境目は不明瞭である。京都VI期新（13世紀中頃）に属する。

## (5) 瓦類

軒丸瓦(図版21、図16) (瓦1)は複弁蓮華文軒丸瓦で、外区に珠文帯と唐草文を配する。平安時代中期。森ヶ東瓦窯産である。整地土層4から出土した。(瓦2～瓦4)はいずれも複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で蓮子は1+4である。蓮弁は凸線で互いに接する。瓦当部側

面は横ナデ、裏面はナデを施す。平安時代後期。京都産。瓦2は整地土層4、瓦3は土坑285、瓦4は土坑658から出土した。(瓦5)は左巻き三巴文軒丸瓦である。頭部は離れ尾部は互いに接しない。外区には大粒の珠文が密に巡る。瓦当部側面は横ナデ、裏面はオサエ後に横ナデを施す。平安時代後期。京都産。土坑134から出土した。(瓦6)は右巻き二巴文軒丸瓦である。頭部は離れ尾部は互いに接して界線となる。外区には大粒の珠文が密に巡る。瓦当部側面は横ナデを施す。平安時代後期。京都産。土坑224から出土した。

軒平瓦 (図版 21、図 16) (瓦7)は唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向C字形で、唐草文が

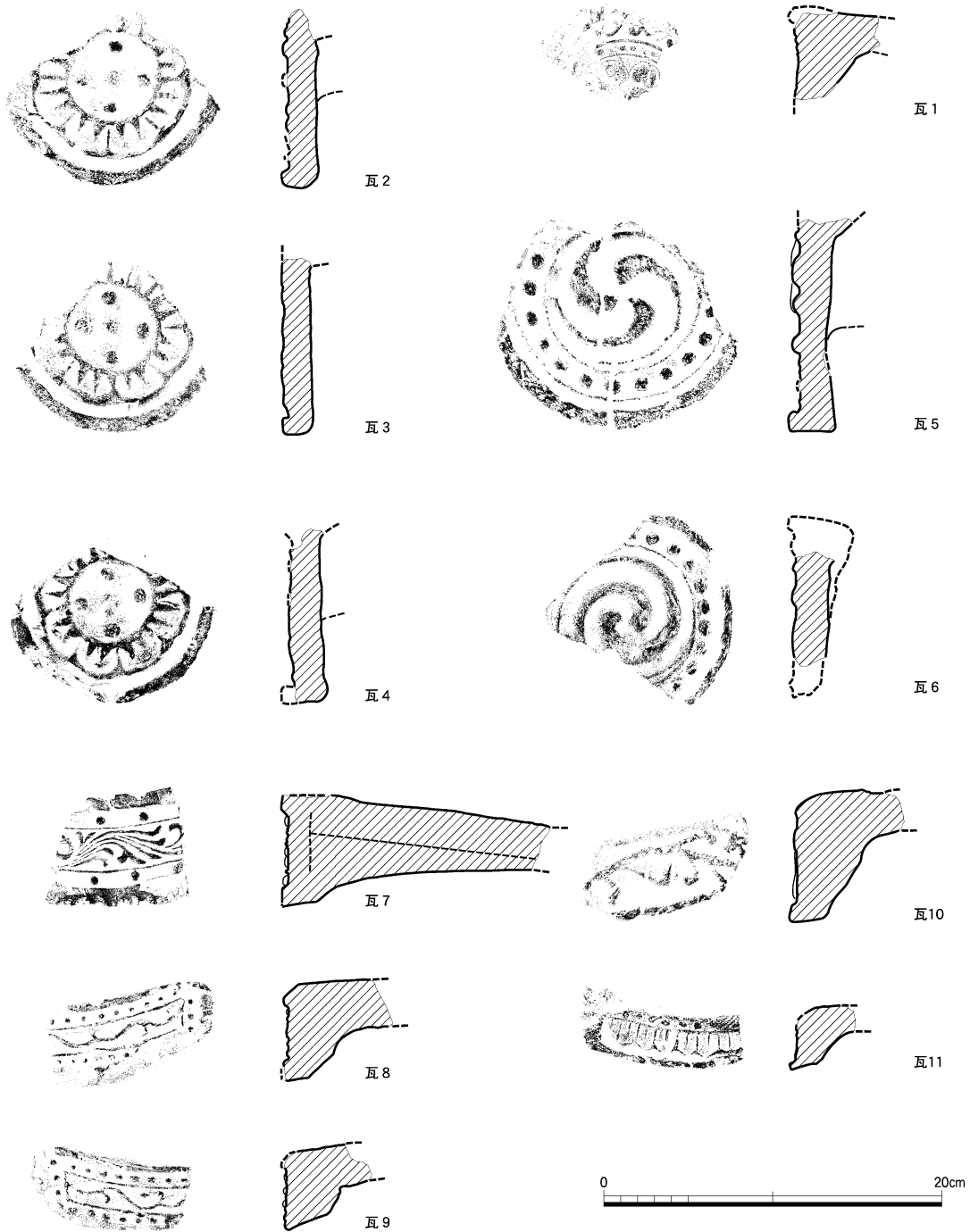


図 16 軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)

両側に3回転するタイプである。外区は珠文が巡る。曲線顎。瓦当部成形は、平瓦凸面に粘土を付加する。瓦当部凹面と顎部側面はケズリ、顎部凸面と裏面はナデを施す。平瓦部凹面には布目痕がみられ、凸面はナデを施す。平安時代中期。京都産。石組790から出土した。(瓦8・瓦9)はいずれも唐草文軒平瓦である。唐草文は両側から中心に展開する。主葉は連続して緩やかに反転し、支葉は巻く。外区には珠文が密に巡る。曲線顎。瓦当部凹面と顎部凸面は横ケズリ、裏面はオサエ後にナデを施す。平安時代中期。京都産。いずれも整地土層4から出土した。(瓦10)は唐草文軒平瓦で、唐草文の主葉は連続して直線的に反転し、支葉はカギ形となる。曲線顎。顎部凸面は横ケズリ、裏面はナデを施す。平安時代後期。京都産。整地土層4から出土した。(瓦11)は剣頭文軒平瓦である。内外区を分ける界線や珠文帯を有し、剣先部は凸線で表す。凹面の布目圧痕は比較的細かく、瓦当近くに布端がみられる。瓦当外周下部は横ケズリ、顎から平瓦部にかけては指圧痕がみられる。瓦当部は折り曲げ成形、顎部は別粘土で補強している。平安時代後期。京都産。整地土層4から出土した。

## (6) 自然遺物など

### 土サンプルの分析

土坑100に埋納された灰釉系陶器の壺(60)からは、内容物として銭貨「紹聖元寶」1点、炭化コムギ果実1点、銭貨に付着したイネ穎を検出した。銭貨は壺内の底部辺り、炭化コムギは洗浄土壌から確認した。

土坑132・石組250は多量の人骨片と炭化材や炭化した種実が出土している。人骨片は被熱による亀裂や収縮が見られ、焼かれていると考えられる。骨は指先端の基節骨・椎骨の一部などが確認できる。燃料と思われる炭化材は、アカガシ亜属・コナラ亜属・クリ・散孔材・針葉樹が認められる。種実のコメ果実・センダン核・アカネ科果実・不明球果を1個体ずつ検出した。

溝290の焼土層(上層)からは、焼けた壁土が出土した。一部は壁面が残存する。あり藁スサを含み、長石の小礫が混入している。

土坑449に埋納された須恵器の壺(16)からは、内容物として土玉4点、銭貨「延喜通寶」44枚、ガラス玉1点を検出した。土玉は壺の上段から、銭貨は全体に見られ下段では底部内面中央の高まりを取り巻いて折り重なるように並んでいた。中段あたりからは昆虫上翅を検出した。

石敷784からはヒノキと思われる炭化した木材が多量に検出した。恐らく火を受けた建築部材と考えられる。

竪穴850からは焼土と炭化したミカン科のキハダの種実を検出した。焼土は一部に面があり、スサは含まない。キハダは核を含む果実の一部を確認した。

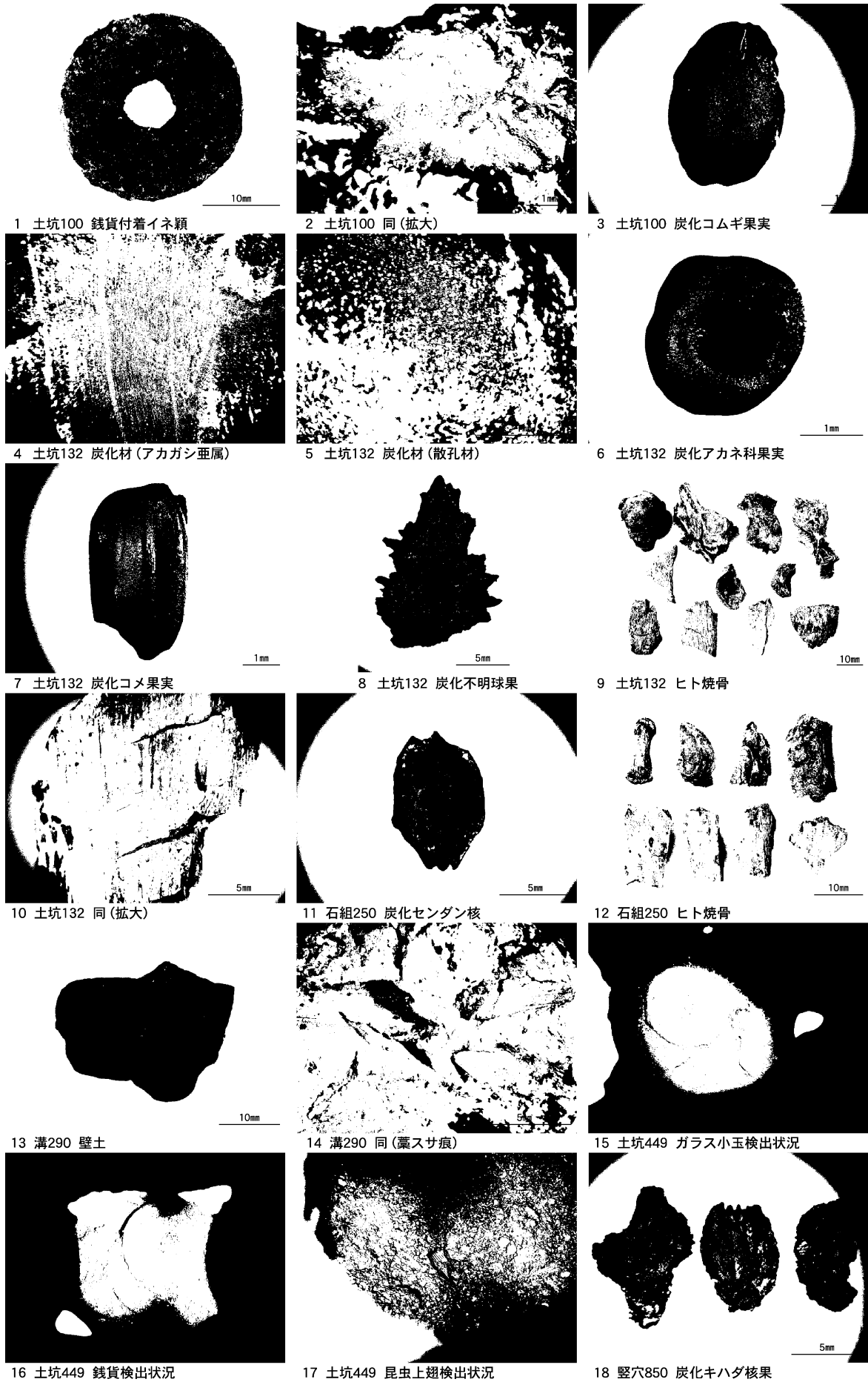


図 17 自然遺物など

## 5. ま と め

調査地は、常盤仲之町遺跡の南東部と広隆寺旧境内に隣接している。常盤仲之町遺跡では、既調査で飛鳥・奈良時代の集落跡や平安時代の建物跡、また鎌倉時代から江戸時代の建物跡や墓跡などを検出しており、常盤仲之町遺跡とその周辺は、墓域・寺跡・別業が立地する都城隣接地としての特有の遺跡として捉えることができるだろう。今回の調査でも飛鳥時代から室町時代の遺構が良好に残存することが判明した。以下、時期別に調査地の様相を要約する。

飛鳥時代（図 18）常盤仲之町遺跡の南には、飛鳥時代に聖徳太子から賜った仏像を安置するために、太子没後に秦河勝が建立した蜂岡寺と伝承される広隆寺が現存する。広隆寺の創建については、現存する史料としては最も古い、平安時代初頭の承和三年（836）に作成された『広隆寺縁起』に、旧寺地の葛野郡九条荒見社里・河原里から現広隆寺境内に比定される葛野郡五条荒蒔里に遷したとある。広隆寺の前身とされる葛野秦寺の寺地である九条荒見社里・河原里の位置については諸説あるが、北区北野白梅町の北野廃寺説が有力である。しかし、広隆寺旧境内からも飛鳥時代の瓦や土器などの遺物が出土しており、飛鳥時代すでに現在地に移建されたとする説や、両地に併存していたが平安遷都に伴い広隆寺に統合された説もあり定説を見ない。今回の調査で竪穴

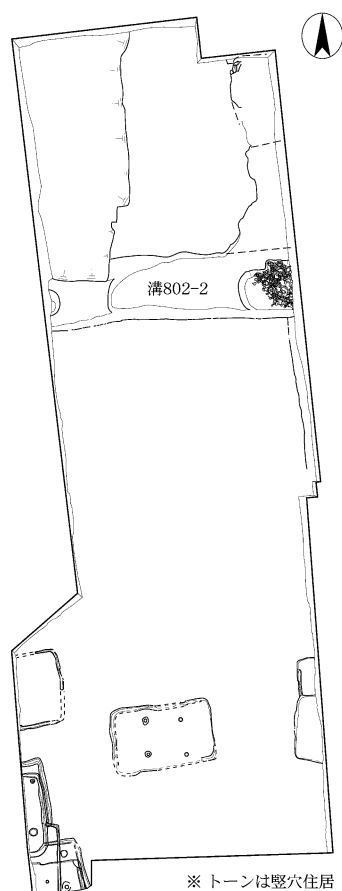


図 18 飛鳥時代遺構概略図（1）

住居を 10 棟検出した。調査区南半に集中するが、北半でも 1 棟検出しており、北半は削平を受けた可能性が高い。常盤仲之町遺跡では、北部にあたる 1974 年の調査で古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居を 24 棟、2006 年の調査では飛鳥時代の竪穴住居を 6 棟検出し、常盤東ノ町古墳群を囲むように点在していたと想定されている。竪穴住居は広隆寺旧境内の範囲内でも多数検出されており、広隆寺と集落との関係が重視されてきた。今回検出した竪穴住居群は、それぞれ北でやや西に傾く類似した方向を有しており、一定の規則性がみられる。また、北半で検出した東西方向の溝 802 は、傾きが少なく真東西に近い。一定の方位をもつ飛鳥時代の竪穴住居群については、葛野郡条里が施行される以前であることから、広隆寺旧境内の伽藍建物や寺域方位が影響を与えていると考えられる。そのことは、調査区西に隣接する 1995 年の調査で検出された飛鳥時代の竪穴住居の竈の支脚材に、広隆寺造営当初の瓦が転用されていた事例<sup>1)</sup>からも窺える。常盤仲之町遺跡の北部で検出された不定方向の竪穴住居群は、墓域と居住地との関連で捉えることができる。南部では古墳群の造営が終結する 7 世紀後半以降は、寺院造営との関連で、

居住地が制約され移動した可能性が高い。

平安時代（図 19） 広隆寺は平安時代に二度にわたり大きな火災に見舞われ全焼し、再建を余儀なくされている。最初は、弘仁九年（818）に焼亡し、承和三年（836）には再興されていることが『広隆寺縁起』・『類聚国史』に記載されている。二度目は、久安六年（1150）に焼亡し、永万元年（1165）に再興されたことが『台記』・『広隆寺銅鐘銘』に記載されている。調査区北半で検出した溝 290 や高まり 272、それに伴う石組 790・石敷 784 と南の東西方向の路面 793 などは、出土遺物から 10 世紀後半から 11 世紀後半の遺構であることから、二度目の焼亡前の広隆寺に関連する区画を示す施設と考えられる。高まり下層では東西方向の溝や礫敷きを検出し、9 世紀から 10 世紀の遺物が出土している。さらに地山面では飛鳥時代の東西方向の溝 802 も検出しており、区画の変遷が窺われる。また、高まり南斜面で検出した土坑 449 は、高まりや近接する道路の敷設や修復に際しての地鎮にかかわる遺構とみられる。このように、高まり部とそれに関連する遺構は、広隆寺の寺域の区画にかかわる遺構である可能性が高い。また、調査地は広隆寺旧境内の東端外に位置すると考えられてきたが、北側の 2008 年度調査では現城北街道に沿って幅 2 m 以上の中世の南北溝、南側の 2009 年度 2 区調査でも東端で同様の溝を検出している。さらに、2008 年度の調査では、築地のもと考えられる奈良時代から中世にかけての瓦が多数出土しており、ここに南北の区画が存在する。遺構の時期や位置からみて、これらの遺構が広隆寺旧境内の東限になる可能性が高い。

鎌倉時代から室町時代（図 20） 調査区の北半と南半では高まりを界して、遺構の様相が異なる。北半の北端では室町時代後半とみられる底面に石組 250 を据えた土坑 132 を検出した。灰・炭の厚い堆積層内から火葬人骨片、鉄釘などが出土し、また石組を構成する石材は熱を受け赤変し、石組内には炭・灰と鉄釘や火葬人骨片がみられたことから、土坑 132 は火葬遺構と考えられる。火葬遺構は 2008 年度調査の落込 29 に連続することから南北長は約 10 m 以上の規模となる。また、火葬遺構の東近接地に据えられていた礎石 280

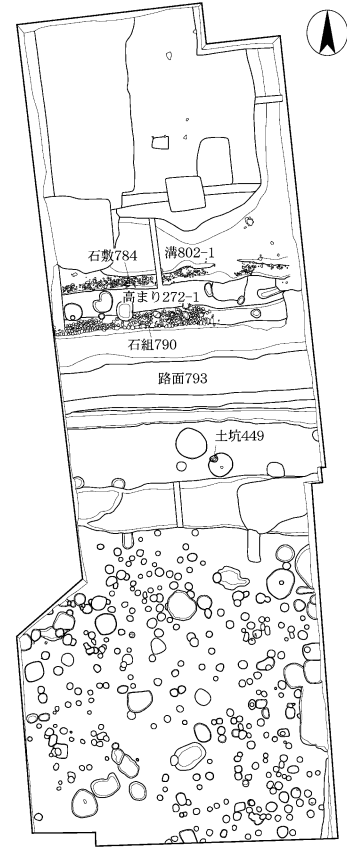


図 19 平安時代遺構概略図（1 :

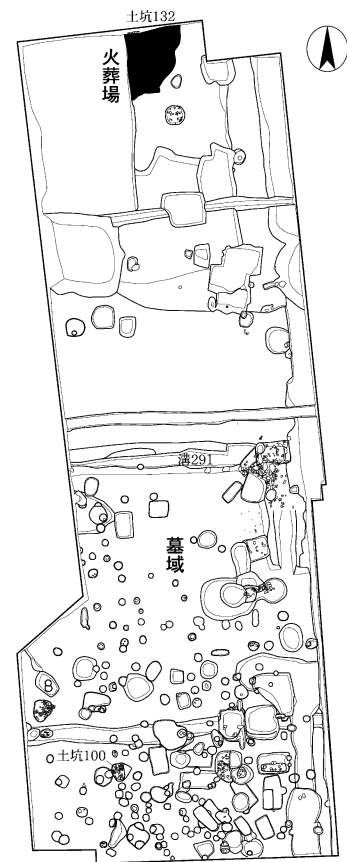


図 20 鎌倉時代から室町時代遺構概略図（1 : 400）

は単独ではあるが、火葬場に関連する施設の存在を示唆している。高まり南縁部に沿った溝 291 以南には鎌倉時代から室町時代の柱穴、土坑、溝などの遺構を多数検出した。特に土坑については、平面形状が方形（土坑 15・59・90・148・154・268・276 など）と楕円形（58・100・102・108・282 など）がある。これらの土坑は、属性から火葬墓と土葬墓に分かれる。火葬墓は、多量の土師器皿を入れ、須恵器壺、瓦器鍋や羽釜などの大型容器を入れたものである。また、底面に小礫を敷き、埋土に炭層がみられるものもある。土坑 100 をみると、平面形状が楕円形で、多量の土師器皿と、銭貨と稲の籾殻を入れた須恵器壺を正位置に納めている。土葬墓は、土坑 15 のように平面形状が方形で、掘形内に長さ約 1.3m、幅 0.4m 内外の木棺が据えられていたとみられる掘込みがあり、また、鉄釘片も点在し、土師器皿の完形がまとまって出土している。また、土坑 268 のように方形で、小石室状に石で囲ったものもあり、土葬墓のあり方は多様である。火葬墓については、壺や鍋・釜などの大型容器を蔵骨容器として納めたものがほとんどである。火葬と土葬が併存するこれらの墓の時期は、13 世紀初頭から 13 世紀末におさまる。葬送儀礼の変遷の中で火葬墓が庶民に浸透しつつある時期と対応すると考えられる。これらの土壙墓がつくられた鎌倉時代から室町時代にかけては、化野や蓮台野が平安京西郊の共同葬送地として機能する中で、広隆寺では真言宗の別当が補任され、鎌倉時代後半に火葬を伴う三昧聖等の葬送活動が活発になり、広隆寺・桂宮院の造営による太子信仰・仏舎利信仰・弥勒信仰によって布教を庶民にまで拡大し、葬送の場を広隆寺の表鬼門・北東地にあたる当該地に設けたことが窺える<sup>2)</sup>。今回の調査で検出した火葬場と墓域は、上述した京都近郊での中世の共同葬送地化や広隆寺の葬送活動などの大きな流れの中で捉えることができる。個々の土壙墓の属性については木棺、人骨の有無や、須恵器壺、瓦器羽釜・鍋などの大型容器の用途など、また、土壙墓の形状やあり様の違いから埋葬対象の差違があるのかなど、明らかにすべき問題点は多いが、今後の中世の葬送儀礼解明の資料が得られたことは大きな成果であった。

#### 註

- 1) 「関西文化財調査会による発掘調査実績報告」1995 年度  
表 1-22 1996 年 1 月～4 月に太秦映画村内の建物建替えに伴う調査
- 2) 細川涼一「広隆寺桂宮院と澄禅」『女の中世』日本エディターズスクール出版部 1989 年



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわなかのちょういせき							
書名	常盤仲之町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-16							
編著者名	加納敬二・東 洋一・辻 裕司・竜子正彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわなかのちょういせき 常盤仲之町遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 うずまさひがしほちおかちょう 太秦東蜂岡町 ちない 地内	26100	908	35度 01分 00秒	135度 42分 33秒	2009年12月 21日～2010 年3月12日	約613m <sup>2</sup>	道路拡幅 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
常盤仲之町遺跡	集落跡 ・墓跡	飛鳥時代	竪穴住居、溝	土師器、須恵器		飛鳥時代の竪穴住居を検出。当該期の集落がさらに東側に広がることを確認。 平安時代の溝・道路敷を伴う大規模な区画施設を検出。地鎮土坑を伴う。当該地を東西に区画する施設を構成する遺構である。		
		平安時代	区画施設、柱列、柱穴群、土坑、溝	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、銭貨、土玉、ガラス玉				
		鎌倉時代 ～室町時代	土壙墓群、柱穴群、土坑、溝	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、銭貨、鉄製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-16

## 常盤仲之町遺跡

発行日 2010年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961